

県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報

平成11年度

中 東 遺 跡

原 間 遺 跡

多肥宮尻遺跡

須田・中尾瀬遺跡

尾の上遺跡

本村中遺跡

田村遺跡

花池尻北遺跡

川津六反地遺跡

岡清水遺跡

上林遺跡

小僧遺跡

2000. 3

香川県埋蔵文化財研究会

例 言

1. 本書は県道事業及び河川改修事業に伴い平成11年度に実施した中東（なかひがし）遺跡，原間（わらま）遺跡，多肥宮尻（たひみやじり）遺跡，須田・中尾瀬（すだ・なかおぜ）遺跡，尾の上（おのうえ）遺跡，本村中（ほんむらなか）遺跡，田村（たむら）遺跡，花池尻北（はないけじりきた）遺跡，川津六反地（かわつろくたんじ）遺跡，岡清水（おかしみず）遺跡，上林（かみばやし）遺跡，小僧（こぞう）遺跡，計12遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は，香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は，次のとおりである。

〈総括〉		〈総務〉		〈調査〉	
所長	菅原 良弘	副主任	六車 正憲	参事	長尾 重盛
次長	川原 裕章	副主任	田中 秀文	主任文化財専門員	大山 真充
		係長	新 一郎	主任文化財専門員	藤好 史郎
		主査	長尾寿江子	文化財専門員	西岡 達哉
		主査	山本 和代		
		主任主事	細川 信哉		

(中東遺跡・田村遺跡)		(花池尻北遺跡，上林遺跡)	
文化財専門員	宮崎 哲治	主任技師	香西 亮
文化財専門員	増井 泰弘	技師	小野 秀幸
調査技術員	糸山 晋	調査技術員	山坂 浩樹
(原間遺跡)		(川津六反地遺跡)	
文化財専門員	片桐 孝浩	文化財専門員	池田 道雄
文化財専門員	多田 佳弘	文化財専門員	川井 國博
調査技術員	正山 泰久	調査技術員	秋山 亮
(多肥宮尻遺跡)		(岡清水遺跡)	
文化財専門員	川井 國博	文化財専門員	池田 道雄
技師	小野 秀幸	文化財専門員	川井 國博 主任技師 香西 亮
調査技術員	秋山 亮	調査技術員	山坂 浩樹 調査技術員 秋山 亮
(須田・中尾瀬，尾の上，本村中遺跡)		(小僧遺跡)	
主任文化財専門員	蓮本 和博	主任文化財専門員	蓮本 和博
文化財専門員	蔵本 晋司	技師	信里 芳紀
調査技術員	中村 文枝	調査技術員	東条 貴美

4. 調査に際しては次の機関に協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同敬称略)

香川県土木部道路建設課，香川県観音寺土木事務所，香川県善通寺土木事務所，香川県坂出土木事務所，香川県高松土木事務所，香川県長尾土木事務所，地元各自治会，地元各水利組合

5. 本書で使用した遺構略号は，次のとおりである。
SA：柵列 SB：掘立柱建物 SD：溝状遺構 SE：井戸 SH：竪穴住居跡
SK：土坑 SP：ピット SR：自然河川 SX：性格不明遺構
6. 本書で用いている方向の北は国土座標第IV系の北である。
7. 本書の執筆は，調査担当職員が分担して行い，執筆者名は目次に記した。挿図の作成・浄書については調査各担当職員が行った。なお，編集は小野・香西が行った。

本文目次

I. 調査の経緯と経過…………… (藤好) 1	VIII. 田村遺跡
II. 中東遺跡	1. 立地と環境…………… (宮崎) 31
1. 立地と環境…………… (宮崎) 3	2. 調査の成果…………… (宮崎) 31
2. 調査の成果…………… (宮崎) 3	3. まとめ…………… (宮崎) 38
3. まとめ…………… (宮崎) 8	IX. 花池尻北遺跡
III. 原間遺跡	1. 立地と環境…………… (小野) 40
1. 立地と環境…………… (多田) 9	2. 調査の成果…………… (小野) 41
2. 調査の成果…………… (片桐) 9	3. まとめ…………… (小野) 42
3. まとめ…………… (片桐) 13	X. 川津六反地遺跡
IV. 多肥宮尻遺跡	1. 立地と環境…………… (池田) 46
1. 調査の経過…………… (小野) 14	2. 調査の成果…………… (池田) 46
2. 調査の概要…………… (小野) 14	3. まとめ…………… (池田) 47
3. 調査の成果…………… (小野) 16	XI. 岡清水遺跡
4. まとめ…………… (小野) 23	1. 立地と環境…………… (川井) 48
V. 須田・中尾瀬遺跡	2. 調査の成果…………… (池田) 48
1. 立地と環境…………… (西岡) 25	3. まとめ…………… (池田) 53
2. 調査の成果…………… (蓮本) 25	XII. 上林遺跡
3. まとめ…………… (西岡) 27	1. 立地と環境…………… (小野) 54
VI. 尾の上遺跡	2. 調査の成果…………… (小野) 54
1. 調査の成果…………… (西岡) 29	3. まとめ…………… (小野) 55
2. まとめ…………… (西岡) 29	XIII. 小僧遺跡
VII. 本村中遺跡	1. 立地と環境…………… (信里) 56
1. 調査の成果…………… (西岡) 30	2. 調査の成果…………… (信里) 57
2. まとめ…………… (西岡) 30	

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000) ……………	3	第28図	角錐状石器実測図 (2/3) ……………	30
第2図	調査区配置図 (1/1,000) ……………	4	第29図	遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000) ……………	31
第3図	遺構配置図 (1/300) ……………	5	第30図	調査区配置図と周辺の地形 (1/5,000) ……………	32
第4図	S D01出土遺物実測図 (1/4) ……………	6	第31図	遺構配置図 (1/250) ……………	33
第5図	S T01平・断面図 (1/60) ……………	7	第32図	S K01平・断面図 (1/25) ……………	35
第6図	S T01出土遺物実測図 (1/4) ……………	8	第33図	S D02平・断面図 (1/40) ……………	37
第7図	古墳時代の遺構配置図 (推定 1/1,500) ……………	8	第34図	出土遺物実測図① (1/4) ……………	38
第8図	遺跡位置図 (1/25,000) ……………	9	第35図	出土遺物実測図② (1/6) ……………	39
第9図	S H02平・断面図 (1/40) ……………	10	第36図	遺跡位置図 (1/50,000) ……………	40
第10図	原間遺跡調査区位置図……………	11・12	第37図	土器溜まり出土遺物 (1/4) ……………	41
第11図	原間遺跡遺構平面図……………	11・12	第38図	S B02平・断面図 (1/80) ……………	41
第12図	S H02出土遺物実測図 (1/4) ……………	13	第39図	S B03平・断面図 (1/80) ……………	42
第13図	遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/25,000) ……………	14	第40図	遺構平面図及び調査区割図 (1/400) ……………	43・44
第14図	II区 S D01土層 (1/40) ……………	16	第41図	花池尻北遺跡出土火打石 (1/2) ……………	45
第15図	II区 S R01地山直上出土石器 (1/2) ……………	17	第42図	遺跡の位置図 (1/50,000) ……………	46
第16図	II区 S R01中層の下段出土遺物 (1/4) ……………	18	第43図	川津六反地遺跡遺構配置図……………	47
第17図	II区 S R01中層の上段出土遺物 (1/4) ……………	19	第44図	川津六反地遺跡調査区割図……………	47
第18図	II区 S R01中層の上段遺物出土状況 (1/30) ……	19	第45図	遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/50,000) ……………	48
第19図	I区 S R02出土人形 (1/2) ……………	20	第46図	S T01平・断面図 (1/40) ……………	50
第20図	遺構平面図 (1/400) ……………	21・22	第47図	S T02平・断面図 (1/40) ……………	50
第21図	III区 S R01土層 (1/40) ……………	24	第48図	岡清水遺跡遺構配置図……………	51・52
第22図	II区 S R01土層 (1/40) ……………	24	第49図	岡清水遺跡調査区割図……………	51・52
第23図	遺跡位置図 (1/135,000) ……………	25	第50図	S X03平・断面図 (1/80) ……………	53
第24図	調査地区割図 (1/1,000) ……………	26	第51図	遺跡位置図 (1/25,000) ……………	54
第25図	不明石製品実測図 (1/8) ……………	27	第52図	遺構平面図 (1/400) ……………	55
第26図	調査位置図 (1/1,000) ……………	29	第53図	周辺の遺跡……………	56
第27図	調査位置図 (1/1,000) ……………	30	第54図	II b区 平面図……………	58

写真目次

写真1	調査区全景 (南から) ……………	4	写真10	S H03検出状況 (南東から) ……………	11・12
写真2	調査風景 (背景は盛土山古墳 北西から) ……………	4	写真11	II区 S R01 (西から) ……………	14
写真3	S D01完掘状況 (東から) ……………	5	写真12	I区 S R02 (北から) ……………	15
写真4	S T01埋葬施設全景 (南から) ……………	8	写真13	I区 S R01木製品出土状況① (北から) ……………	16
写真5	S T01土層断面 (北東から) ……………	8	写真14	I区 S R01木製品出土状況② (東から) ……………	16
写真6	盛土山古墳遠景 (北西から) ……………	8	写真15	I区 S R01木製品出土状況③ (北西から) ……………	16
写真7	S H02炭化木材検出状況 (東から) ……………	10	写真16	II区 S R01中層の下段遺物出土状況 (南西から) ……	18
写真8	調査区全景遺構検出状況 (南から) ……………	11・12	写真17	I区 S R02遺物出土状況① (東から) ……………	18
写真9	調査区中央部竪穴住居検出状況 (北西から) ……	11・12	写真18	I区 S R02遺物出土状況② (東から) ……………	19

写真19	II区 S R01中層の上段土器集中箇所（南から）	…20	写真42	S K01底型検出状況（南東から）	…36
写真20	III区 遺構完掘状況（西から）	…20	写真43	S K01底型断ち割り（北東から）	…36
写真21	I区 S D01（北から）	…23	写真44	S D02遺物出土状況（東から）	…36
写真22	調査地全景	…26	写真45	S D01完掘状況（西から）	…37
写真23	I区（西から）	…28	写真46	S D01・02土層断面（南東から）	…37
写真24	堅果類出土土坑群（南から）	…28	写真47	土器溜まり検出状況（東から）	…41
写真25	石斧柄出土状況（西から）	…28	写真48	S B02（北から）	…42
写真26	不明石製品出土状態（東から）	…28	写真49	II区 遺構東半遺構完掘状況（北から）	…43・44
写真27	III区（北部）（東から）	…28	写真50	I区 遺構全景（西から）	…43・44
写真28	III区（南）（東から）	…28	写真51	I区 南西隅遺構近景（北から）	…45
写真29	III区（東から）	…28	写真52	I区 完掘状況（西から）	…47
写真30	IV区（西から）	…28	写真53	II区 S D02遺物出土状況（南から）	…47
写真31	調査地全景	…29	写真54	S H02完掘状況（東から）	…50
写真32	遺構検出状態（西から）	…29	写真55	S H06～10完掘状況（西から）	…50
写真33	自然河川跡（南から）	…29	写真56	S H11完掘状況（西から）	…50
写真34	調査地全景	…30	写真57	S H14完掘状況（西から）	…50
写真35	遺構検出状態（西から）	…30	写真58	S T01検出状況（南から）	…50
写真36	北区全景（南西から）	…32	写真59	S T02検出状況（南から）	…50
写真37	南区南半全景（北東から）	…32	写真60	S X03完掘状況（西から）	…53
写真38	南区中央部（南東から）	…32	写真61	調査区全景	…55
写真39	S X01・03遺物出土状況（南西から）	…34	写真62	II b区 自然流路群（北から）	…58
写真40	S K01遺物出土状況（南東から）	…34	写真63	II b区 北壁土層（南西から）	…58
写真41	S K01完掘状況（南から）	…36			

表 目 次

第1表	平成11年度県道他・河川関係発掘調査一覧	…2	第3表	土器棺墓一覧表	…49
第2表	竪穴住居跡一覧表	…49	第4表	炭化材を多く含む土坑一覧表	…53

I . 調査の経緯と経過

1. 発掘調査

平成11年度の県道（県管理国道を含む）河川関係の埋蔵文化財の発掘調査は、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で平成11年4月1日付けで締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき実施した。当初予定では、県道関係として多度津丸亀線多度津町中東遺跡、大内白鳥インター線大内町原間遺跡、丸亀詫間豊浜線三野町西久保谷遺跡、紫雲出線詫間町須田・中尾瀬遺跡・尾の上遺跡・本村中遺跡、高松丸亀線丸亀市田村遺跡、太田上町志度線高松市多肥宮尻遺跡、中徳三谷高松線高松市上林遺跡、国道438号坂出市川津六反地遺跡、国道193号香南町岡清水遺跡の9路線11遺跡23,335㎡の発掘調査を実施する計画であった。しかし、土木部道路建設課より高松志度線志度町花池尻北遺跡の調査要請があり、西久保谷遺跡の調査にかえて発掘調査を実施し、西久保谷遺跡の発掘調査は次年度送りとなった。また、河川関係としては古川河川改修に伴って大川郡大内町小僧遺跡1,611㎡の発掘調査を実施した。なお、横断道津田引田間の成重遺跡の発掘調査では、同時に県管理国道の国道318号部の調査も実施しているが、概要については四国横断自動車道関係発掘調査概報で報告する。なお、県道紫雲出線須田・中尾瀬遺跡・尾の上遺跡・本村中遺跡と国道193号岡清水遺跡の発掘調査が、工事請負方式で実施し、他はセンター直営で発掘をおこなった。

県道関係の遺跡では以下のものがある。多度津町の中東遺跡では、小規模な古墳の周溝と考えられる方形に巡る可能性がある溝を検出した。溝内からは、近接する盛土山古墳と同時期の須恵質埴輪片等が出土しており、盛土山古墳との関係が注目される。大内町の原間遺跡は、四国横断自動車道で調査した原間遺跡の西南に位置し、弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴住居跡や土坑墓を検出した。高松市の多肥宮尻遺跡は平成9年度からの継続した発掘調査で今年度が最終年度となる。当初は用地取得の関係上供用を急ぐ西側対象地を先行着手し、残地は年度後半に分けて調査せざるを得ない工程であったが、用地取得が見込みより早く進展し他との調査工程の調整がついたため連続した調査となった。調査対象地はその多くが弥生時代中期以降の埋没河川跡で、流路内から木製品等を検出した。詫間町の須田・中尾瀬遺跡では当面する斜面部谷筋で縄文後期の貯蔵穴を検出した。志度町花池尻北遺跡は、同じ県道関係で調査を実施した八丁地遺跡の東に位置し、条里地割に規制された中世の堀立柱建物を検出した。丸亀市田村遺跡は、昨年度側溝部を県教委文化行政課が先行して調査を実施し、梵鐘鑄造土坑が存在することをすでに確認しており、今年度はその大半の部分と鑄造関連施設や田村廃寺の寺院関係の遺構の調査が注目された。調査結果では、平安時代と考えられる残存状況が比較的良好な鑄造土坑全体を検出し、溶解炉壁等がまとまって廃棄された落ち込みを検出した。鑄造土坑内からは撞座鑄型片も出土し、調査区北部では田村廃寺の北端の築地堀の側溝を検出した。高松市上林遺跡は、空港跡地遺跡の南に隣接する遺跡で、条里地割に規制された溝等を検出している。

県管理国道関係から2遺跡を紹介する。坂出市川津六反地遺跡は、平成9年度から調査を実施しており、国道438号関係では昨年度に続いた調査となった。遺跡周辺は条里地割が明確な地域であり、地割に規制された溝跡等を検出している。香南町岡清水遺跡は、香東川が高松平野に入る直前の箇所であり、西から東に下る緩斜面上に立地し、弥生時代中期後半から後期前半期の竪穴住居跡を検出した。

また、河川関係では、大内町小僧遺跡の発掘調査を実施しており、縄文時代後期以降の埋没河川跡を検出している。

2. 整理作業

今年度実施した県道関係の報告書作成業務は次のとおりである。高松志度線の平成6年度発掘調査の本村・横内遺跡，平成6年度～7年度発掘の八丁地遺跡，平成8年度発掘の原中村遺跡があり，高松王越坂出線では平成8年度発掘の雄山古墳群がある。県管理国道の国道438号では川津川西遺跡の報告書作成業務を延べ21ヶ月で実施した。

番号	路線名等	遺跡名	調査面積 (㎡) 平面積	調査期間	遺 構	遺物	調査担当	所在地
1	県道多度津丸亀線	中東	640	H11.7- H11.8	古墳周溝 中世墳墓	埴輪片	宮崎・増井・糸山	多度津町 奥白方
2	県道大内白鳥インター線	原間	1,009	H11.4- H11.5	弥生竪穴住居 7世紀土坑墓	土器	片桐・多田佳・正山	大内町 川東
3	県道太田上町志度線	多肥宮尻	4,195	H11.4- H11.9	弥生理没河川	土器 木器	小野・川井・秋山	高松市 多肥上町
4	県道紫雲出線	須田・中尾瀬,尾の上,本村中	3,672	H11.4- H11.12	縄文貯蔵穴	土器 石器	蔵本・蓮本・中村	詫間町 詫間
5	県道高松丸亀線	田村	650	H11.9- H11.10	古代梵鐘製造土坑 築地側溝	鋳型 炉壁・瓦	宮崎・増井・糸山	丸亀市 田村町
6	県道高松志度線	花池尻北	2,017	H11.10- H12.1	中世堀立柱建物 溝	土器	小野・香西・山坂	志度町 志度
7	国道438号	川津六反地	1,450	H11.12- H12.3	弥生溝・中世溝	土器	池田・川井・秋山	坂出市 川津町
8	国道193号	岡清水	5,600	H11.4- H11.11	弥生竪穴住居 堀立柱建物	土器	池田・香西・川井 山坂・秋山	香南町 岡
9	県道中徳三谷高松線	上林	695	H12.2- H12.3	中世溝	土器	小野・香西・山坂	高松市 林町
10	中小規模河川古川改修	小僧	1,611	H12.1- H12.3	縄文以降埋没河川	土器	信里・蓮本・東条	大内町 川東
11	国道318号	成重	258	H11.12- H12.2	土坑墓	土器	長井・溝渕・多田歩	白鳥町 白鳥
		合 計	21,797					

表1 平成11年度県道他・河川関係発掘調査一覧

Ⅱ. 中東遺跡

1. 立地と環境

中東遺跡は、仲多度郡多度津町奥白方字中東に所在する。天霧山の北東山麓に広がる緩扇状地状にあたり、現在は概ね水田域として土地利用がされている。調査区のほぼ中央には南北方向に小崖が存在しており、東西の比高差は30～50cmを測る。この小崖はいわゆる縄文海進による汀線である可能性があるとの指摘もあり、当該地に関していえば小崖の西側が段丘上、東側が旧河道による氾濫原にあたる。

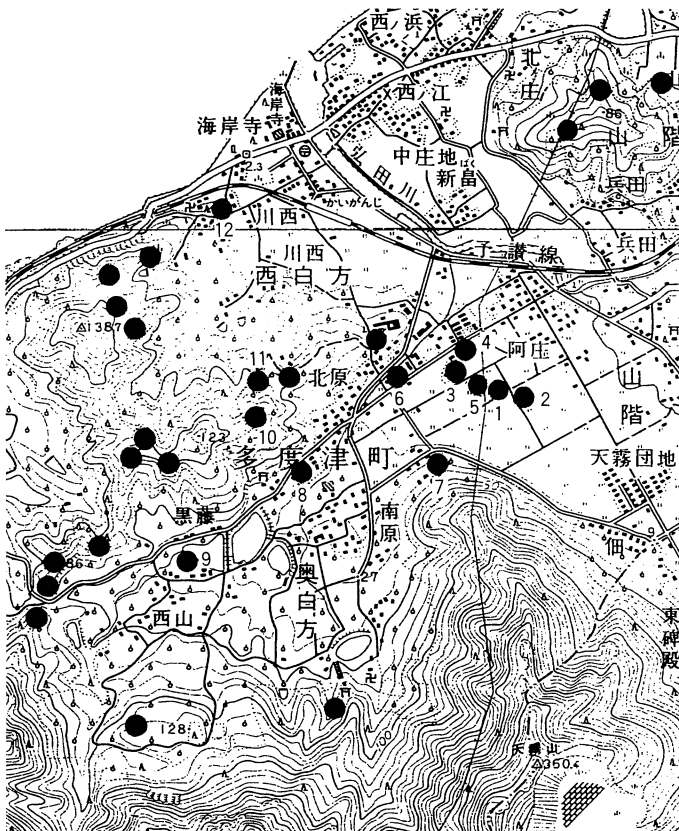
当該地の周囲には幾つかの古墳の存在が知られている。遺跡北西の黒藤山4号墳や御産盥山古墳は前期の前方後円墳であり、中期にはいと遺跡に近接して存在する盛土山古墳が築かれる。2段築成の円墳で画文帯四神獣鏡やトンボ玉などの玉類の出土が伝えられており、平成10年度の範囲確認調査によって二重の周溝を有していることが判明している。後期のものでは天霧山麓の向井原古墳や黒藤山南麓の北ノ前古墳など、横穴式石室墳が所在している。

当該地の周囲には中東古墳群と称される4基程度の塚状の高まりが点在しており、古墳の残骸ないし塚と考えられている。今回の調査区内にも中東1号墳が存在している。

2. 調査の成果

調査は、盛土山古墳の北西にあたる県道計画路線の西端部分にあたる約850m²を対象面積として、2ヶ月の調査期間で実施した。

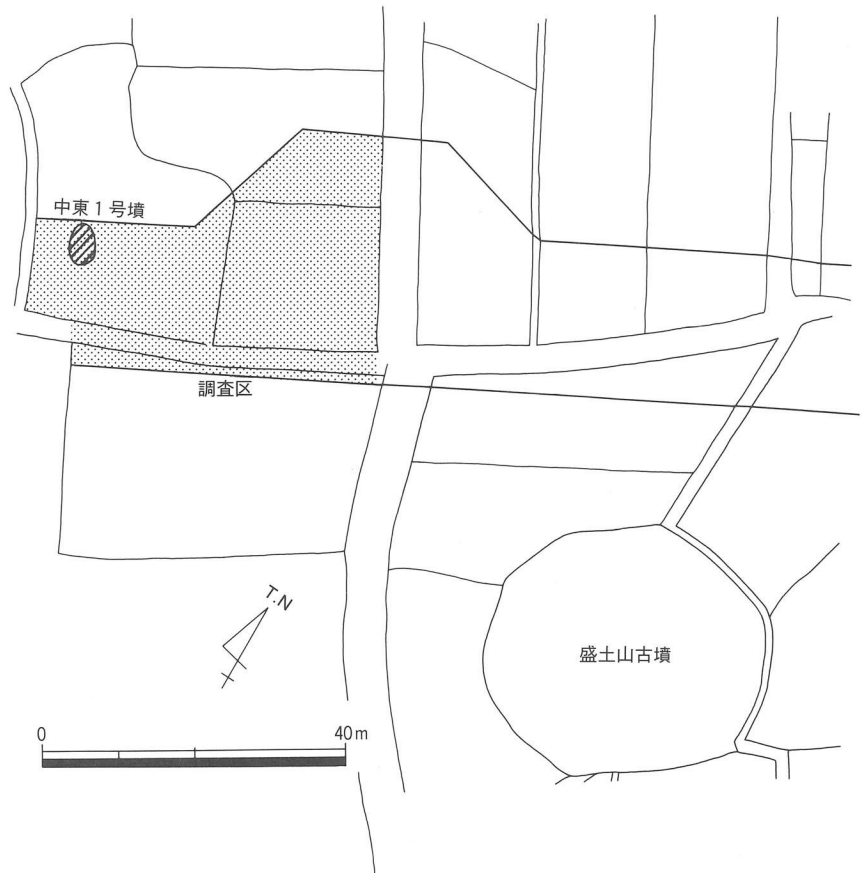
調査区は町道との交差点部分を含むものでいびつな形状を呈しており、水田三筆にまたがっている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

番号	名称	町誌の記載	備考
1	中東遺跡 中東1号墳	中東古墳1	今回調査
2	盛土山古墳	盛土山古墳1	四神四獣鏡・玉類
3	中東2号墳	盛土山古墳2	現在は葡萄畑
4	中東3号墳	中東古墳2	
5		盛土山古墳3	頂部に五輪塔破片
6	寺前古墳		消滅
7	向井原1号墳		横穴式石室
8	北ノ前古墳		横穴式石室
9	西山古墳		消滅、三角縁神獣鏡
10	黒藤山4号墳		前方後円墳
11	黒藤寮跡		須恵器窯、TK10併行期
12	御産盥山古墳		前方後円墳

調査区内には中東1号墳が存在しており調査に時間がかかることが予想されたことから、文化行政課の試掘で判明していた自然河川の部分はトレンチ調査などの手法を併用して調査を実施した。なお、今回の調査は着手前に工事発注がなされていたこともあり、開発側と施工業者および調査側の意志疎通・調整が十分になされていたとは言い難く、このことが調査期間中無用の軋轢を生み出すことにもなった。同様の事態は今後も起こりうる可能性があり、開発側と調査側の連絡・調整を十分に行うなど、配慮すべき事柄であると思われる。



第2図 調査区配置図 (1/1,000)

調査の結果、古墳時代中期頃、鎌倉時代の概ね二時期の遺構・遺物を確認した。調査面積の小ささも反映していると思われるが、検出した遺構は少なく、かつ後世の削平によって遺存状態は良くない。耕作土直下で遺構面を検出していることが、当該地の削平の状況をよく示していると言えよう。

古墳時代の遺構としては、円筒埴輪片を含んだL字状の溝状遺構がある。鎌倉時代の遺構としては、塚、自然河川、溝状遺構、柱穴、土坑などがある。これらの時代以外でも、弥生時代後期の弥生土器の小破片や近世の陶磁器細片などを検出していることから、近辺にそれらの時代の遺構の存在が想定できるが、今回の調査区においては確認していない。

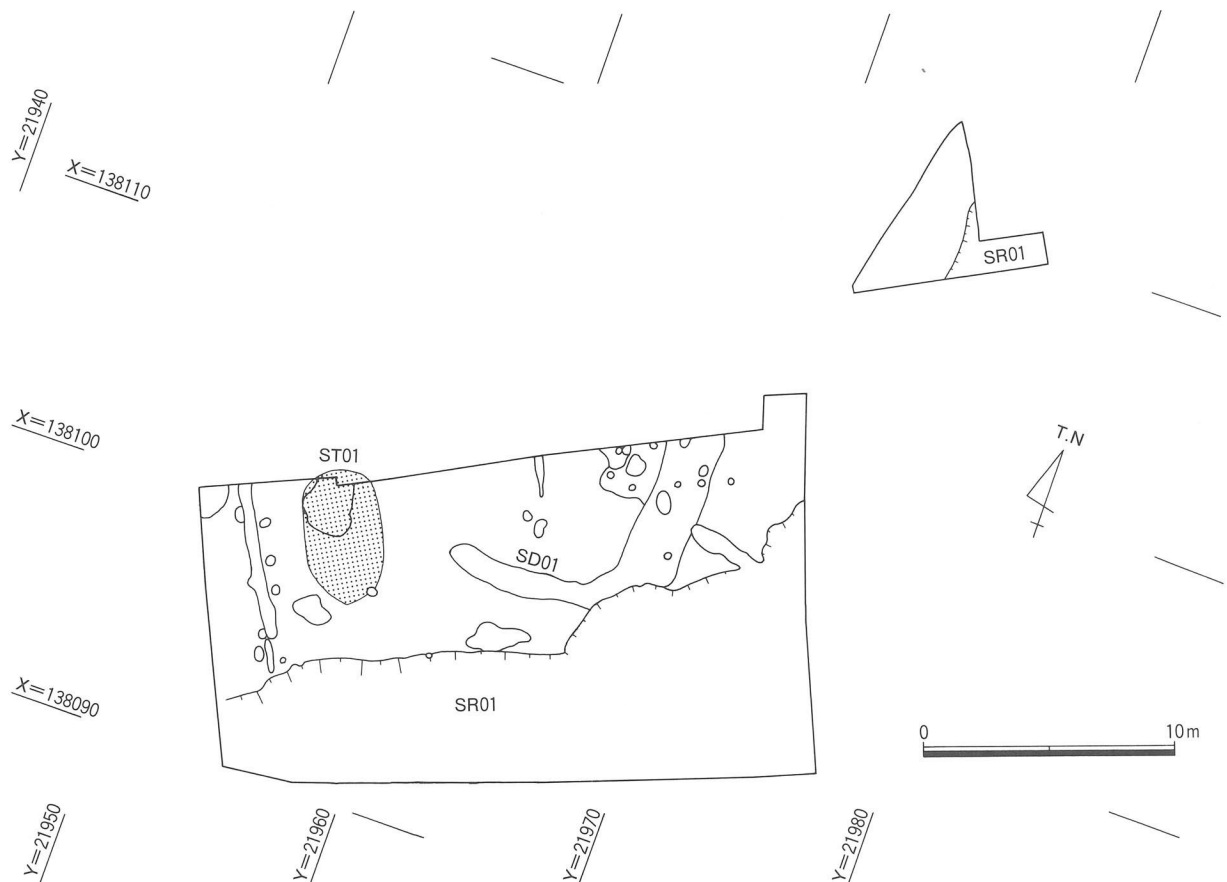
以下、主な遺構について概説する。



写真1 調査区全景 (南から)



写真2 調査風景 (背景は盛土山古墳 北西から)



第3図 遺構配置図 (1/300)

SD01

調査区のほぼ中央北寄りで検出した、平面L字形を呈する溝状遺構である。全体に後世の削平を受けているため溝状遺構の下部を検出できたのみであり、本来の規模については定かではない。ほぼ直角に屈曲するもので、方向はほぼ正方位と一致している。南北方向部分で幅2.0m、深さ15cm、東西方向部分では幅1.2m、深さ20cmの規模を有し、コーナー部分を中世の自然河川によって一部壊されている。断面の形状は緩やかな弧を描いており、埋土は黒褐色粘質土の単層であった。出土遺物は埴輪片だけで、他の土器などは出土していない。埴輪片は溝状遺構の底面及び埋土中から出土している。埴輪片はすべて円筒埴輪であり、朝顔形埴輪及び形象埴輪については確認していない。円筒埴輪は全体の形状が判断できる資料は見られず、焼成の度合いから軟質（土師質3・6・7）と硬質（須恵質1・2・4・5・8）のものがあるが、黒斑を有する破片は認められない。透かし孔は円形のみを確認している。いずれもタガの形状が断面M字形や三角形を呈する突出度の高い傾向がある。外面調整にはB種ヨコハケやタテハケ調整のみのもが見られる。これらの埴輪の年代観は「川西編年」でいうところのIV期でも新しい頃にあたるものと思われ、概ね5世紀後葉と見ることができる。

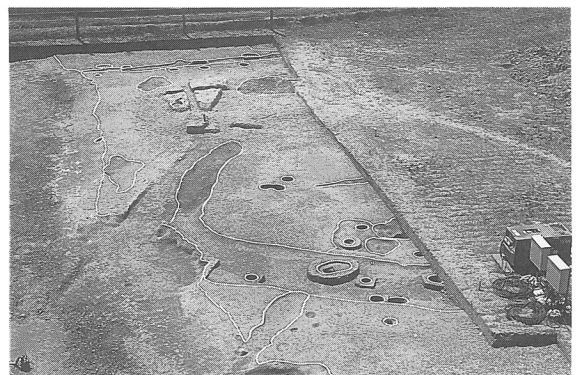
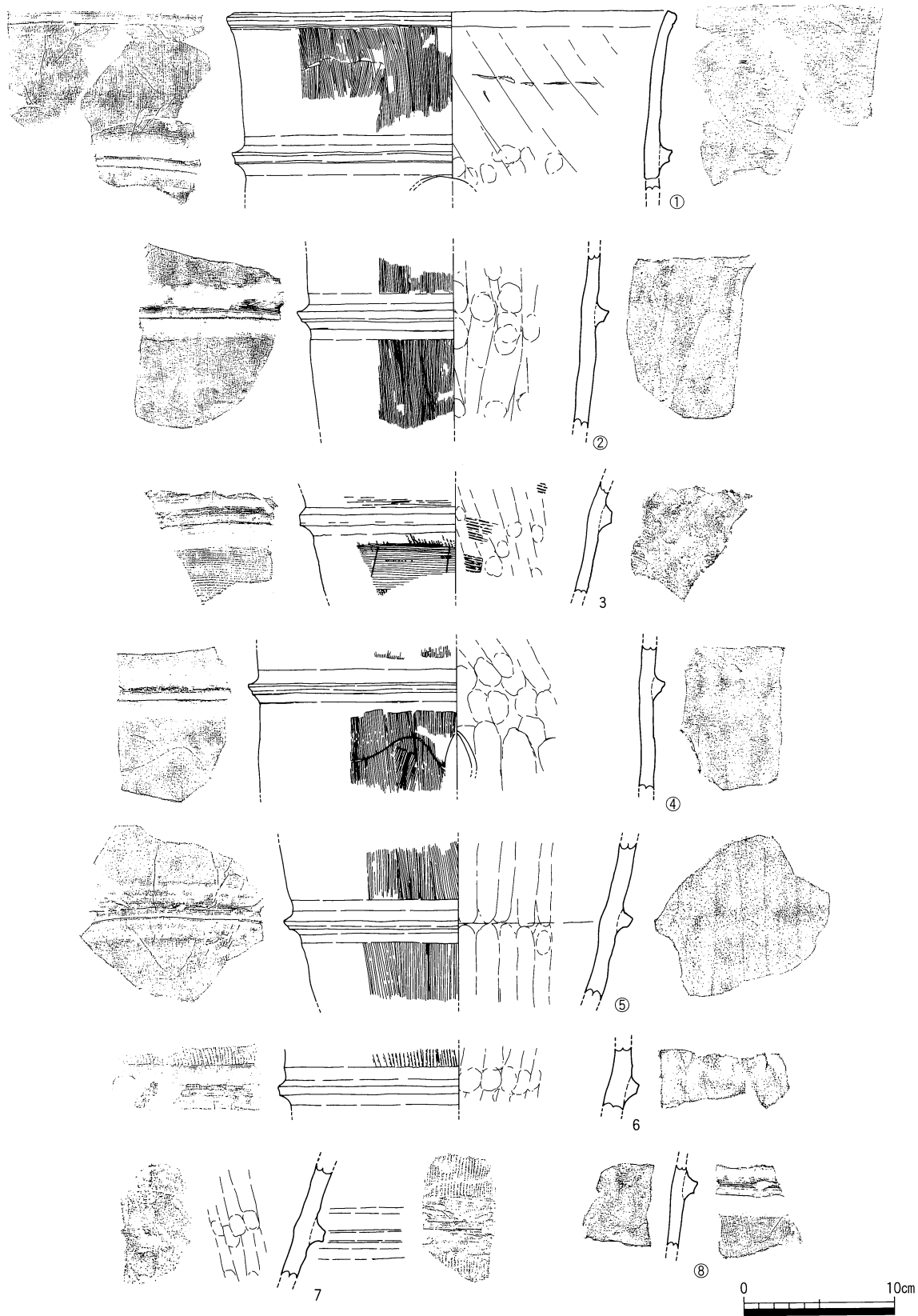


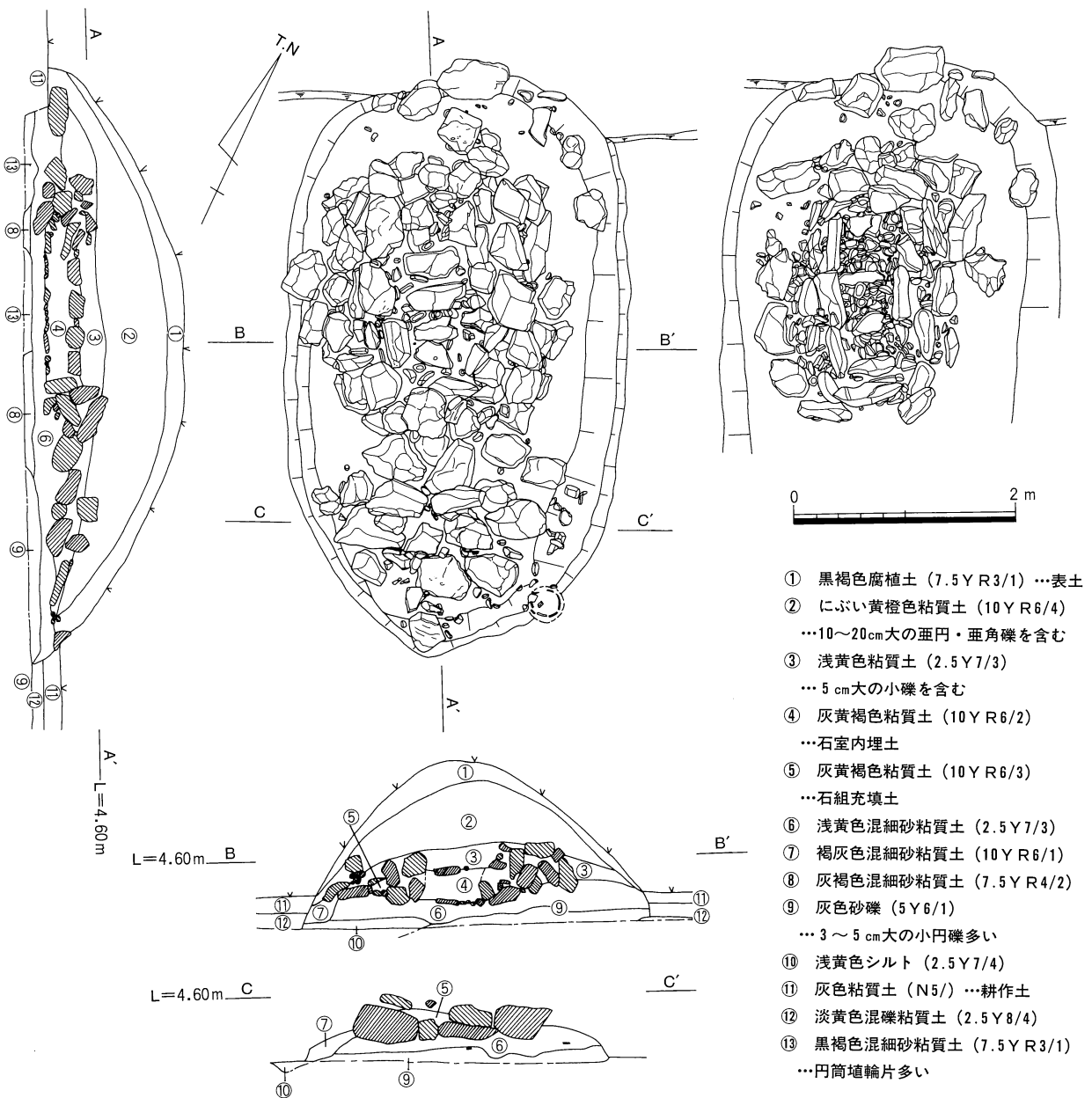
写真3 SD01完掘状況 (東から)



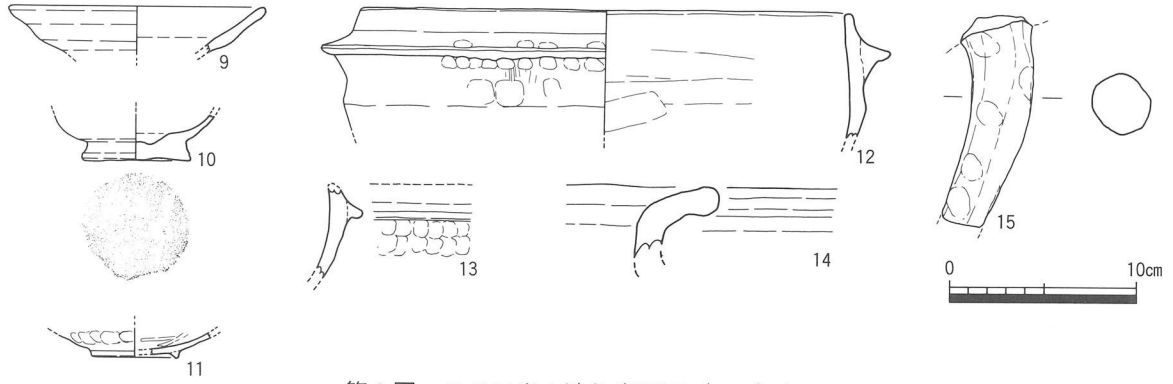
第4图 S D 01出土遺物実測図 (1/4)

S T 01 (中東 1 号墳)

調査区内に所在する南北径5.5m, 東西径3.0m, 高さ1.3mの楕円形をした塚である。従来古墳とされてきたが, 調査の結果, 鎌倉時代の塚であることが判明した。地山上に厚さ20cm程度盛土をした後, 中央部分に長さ50cm前後の塊石で箱式石棺状の埋葬施設を作り, その内部に拳大の礫を敷く。さらに同様の塊石を埋葬施設の周囲におよそ3段分積み上げる。おそらくこの段階で木棺を埋納したものと考えられる。塊石4石を横長に並べて埋葬施設の蓋をした後, 全体を拳大の小礫を最大で60cmの厚さで覆って築かれたものと考えられる。中央の埋葬施設は, 内法で1.6×0.6mを測る長方形を呈している。内部からは図化した土師質土釜の脚 (15) 1点が出土したのみで, 鉄釘などは見られなかったことから, 棺は板材を組み合わせたものを使用したと考えられる。図化した土器類は, 塊石の間や小礫の間から出土したもので, 11は瓦器碗の底部である。これらの土器の年代観から, S T 01は鎌倉時代のものであろう。



第 5 図 S T 01 平・断面図 (1/60)



第6図 ST01出土遺物実測図(1/4)



写真4 ST01埋葬施設全景(南から)



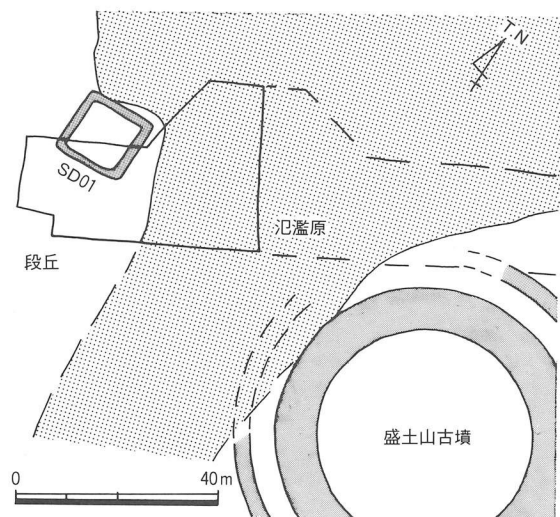
写真5 ST01土層断面(北東から)

3. まとめ

古墳時代のSD01の続きをST01の下位で検出した。これを基に復元すると一辺約15mの方墳が想定できる。埴輪の年代からは盛土山古墳と同時期と考えられ、低地帯を隔てて約60mの距離で段丘上に相對している状況が想定できる。このあり方は、2重の周濠を有し規模の大きな盛土山古墳を主墳とし、それに従属する小規模な方墳という捉え方もできよう。方墳の周溝は正方位と合致しており、計画的な築造が想定できる。県内での類例としては、大川郡大川町の富田茶臼山古墳(前方後円墳 5世紀前半)とその陪塚(3基の方墳)がある。どちらも従属の方が方墳であり、正方位を指向しているという共通点が見られる。また、ST01の塊石は方墳の石室石材を転用したものと思われ、鎌倉時代の段階で破壊されたものであろう。



写真6 盛土山古墳遠景(北西から)



第7図 古墳時代の遺構配置図(推定1/1,500)

Ⅲ. 原間遺跡

1. 立地と環境

原間遺跡は大川郡大内町川東原間に所在する。本遺跡は大内町に広がる平野の南東部、阿讃山脈の分脈である矢筈山系から延びる丘陵に三方を囲まれ、古川水系古川が開析した平野の微高地上に立地する。

原間遺跡は今までに四国横断自動車道建設に伴い平成9・10年度に調査した部分（以後横断道原間遺跡、第11図）と平成9年度に大内白鳥インター線建設に伴い調査した部分（横断道部分より北側に位置する、以後平成9年度県道原間遺跡）がある。今回の調査は平成9年度に引き続き大内白鳥インター線建設に伴い調査を実施したもので、横断道部分より南側に位置している（平成11年度県道原間遺跡、第11図）。



第8図 遺跡位置図（1/25,000）

調査区の標高は22m前後を測り、南から北に緩やかに傾斜しており、横断道原間遺跡より2m程度高い部分に平成11年度県道原間遺跡はある。

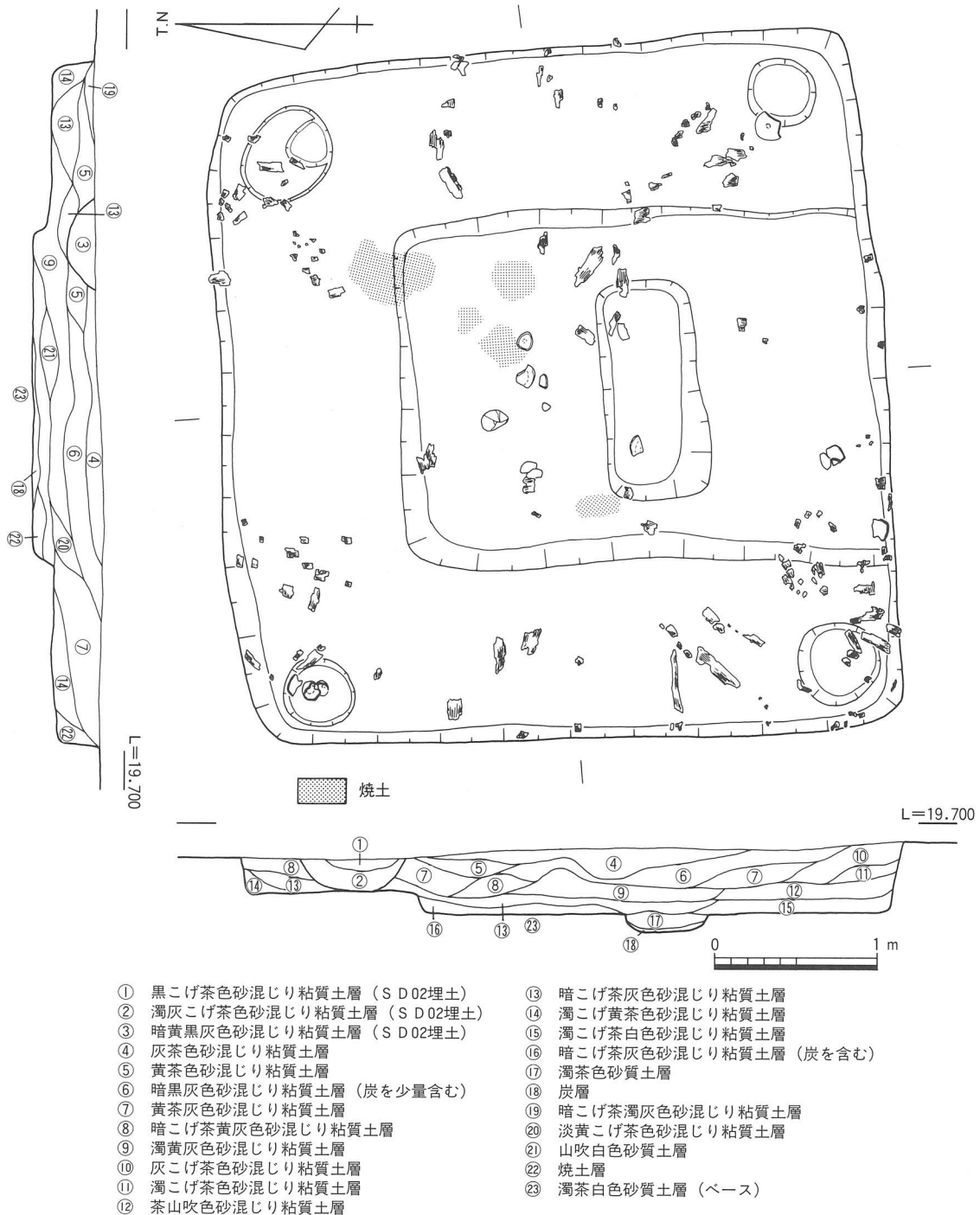
本遺跡の周辺には、主として弥生時代から古代までの遺跡が存在する。昨年度までの調査で横断道原間遺跡の微高部分で集落跡が見つかっており、遺物が多量に出土している。時期は弥生時代の後期後葉を中心とするものである。また、古墳時代の集落としては住屋遺跡がある。原間遺跡から北に約1.2kmに所在する住屋遺跡では古墳時代後期の竪穴住居群が検出されており、当地域の集落域の変遷が推定できる。大内・白鳥両町境にある大日山古墳は古墳時代前期の築造と考えられる前方後円墳である。横断道原間遺跡の丘陵部から古墳時代中期の古墳が9基検出されている。その主体部は木棺・粘土槨木棺・箱式石棺と多様である。このことから古墳時代前期・中期の首長層の墓域は平野部を見渡すことのできる原間地区にあったと考えることができる。古代の遺構はふたたび横断道原間遺跡の丘陵裾部分で検出されており、規格性を持つ掘立柱建物跡が見つまっている。また原間遺跡北東部には古代の高松廃寺跡があることや、弥生時代から古代の集落が原間地区にあることから近接して南海道の推定が可能である。

2. 調査の成果

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代後期の竪穴住居5棟、溝3条、土坑3基、柱穴多数と古墳時代後期の土壇墓3基、柱穴多数である。

弥生時代の竪穴住居には円形のものと同方形のもの、壁溝しか残っていないが多角形状を呈するものの3種類がある。この内円形のものと同角形状のものは弥生時代後期前半のもので方形のものよりやや古い。溝は南東方向から北西方向に流路を取り、調査区を斜めに横切る。現在の地形が南から北方向に傾斜し、溝と方向を異にすることから、検出した溝は人為的に掘削された可能性が指摘できる。また、多数の柱穴を検出したが、掘立柱建物を構成する柱穴の検討はできなかった。

検出した遺構の中で比較的残りの良い方形の竪穴住居SH02について報告する。



第9図 SH02平・断面図 (1/40)

SH02 (第9図)

平面形態は方形で、規模は南北約4.1m、東西約4.25m、検出面からの深さ約0.4mを計る。ほぼ南北に主軸を持つ。土層中より多数の炭化木材を検出したことから、この住居が焼失家屋であることが解る。炭化木材のほとんどが中心部を向くように検出されていることから、竪穴住居の垂木と考えられる。住居内では、ほぼ中央部に焼土を検出し、近接して南側に炭を多量に包含する長方形の土坑を検出した。住居内の構造はおそらく焼土部分が炉で、土坑が火種を蓄えておく施設

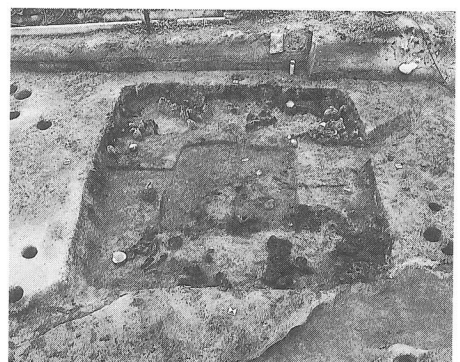


写真7 SH02炭化木材検出状況 (東から)



第10図 原間遺跡調査区位置図



写真8 調査区全景遺構検出状況 (南から)

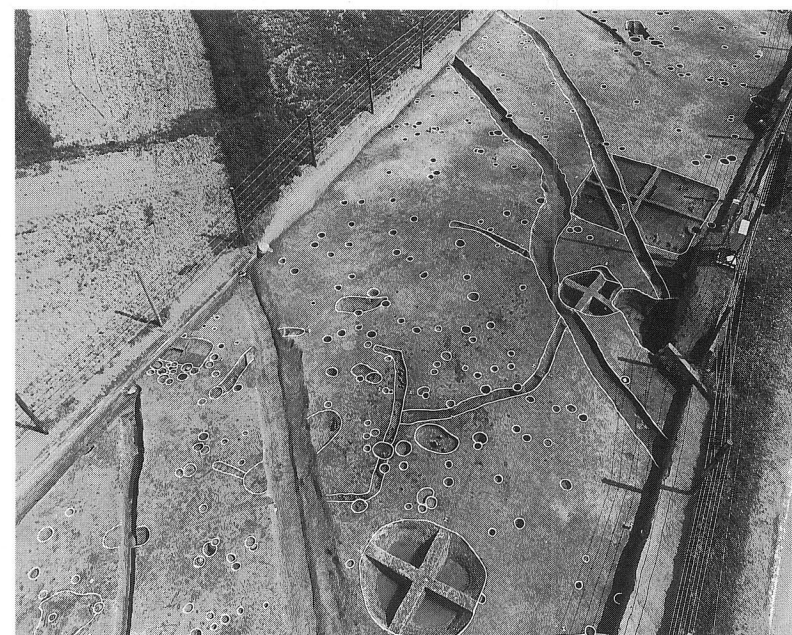
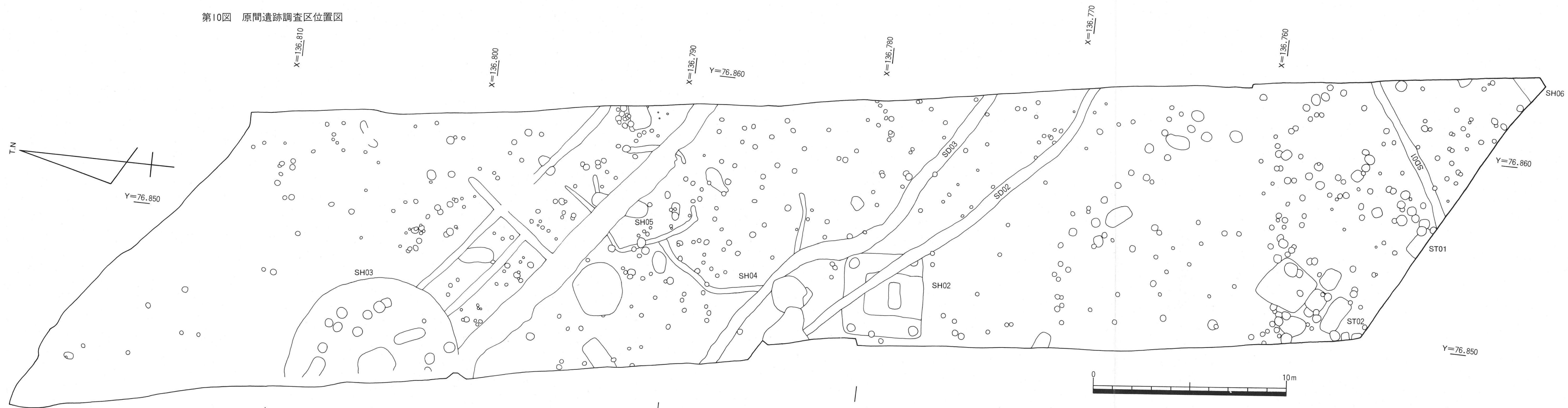


写真9 調査区竪穴住居検出状況 (北西から)



写真10 SH03検出状況 (南東から)



第11図 原間遺跡遺構平面図

と考えられる。このような構造(配置)は横断道原間遺跡で検出した竪穴住居でも確認されており、原間遺跡の弥生時代の集落では一般的なものと考えられる。北・東・西側にはベッドがあり、南側は出入り口のためかベッド状遺構は確認されなかった。四隅には支柱穴があり、北西隅の柱穴からは完形の小型鉢2点が出土している。

遺物は堆積土中から多量の弥生土器片、中央の炉周辺及び支柱穴からやや大きめの弥生土器片が出

土している。1・2・6は床面直上から出土した遺物で、3～6は北西隅の支柱穴から出土した遺物である。

1・2は甕である。口縁端部はあまり拡張させず、やや上部に摘み上げる。頸部内外面には明瞭な稜を持たない。体部内面にはヘラ削り、外面には細かい刷毛目が施されている。3は小型の甕で、「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ。底部は僅かに平底を持ち、体部最大径はほぼ中位にある。体部内面は板ナデが、外面は叩きの後下半部にヘラ削りの後刷毛目が施されている。4～6は鉢である。6はやや大型の鉢で、平底の底部から体部がやや内湾気味に外上方に延びる。体部内面には刷毛目後ヘラミガキが、外面には指頭痕、口縁部外面には刷毛目が施されている。

時期は出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

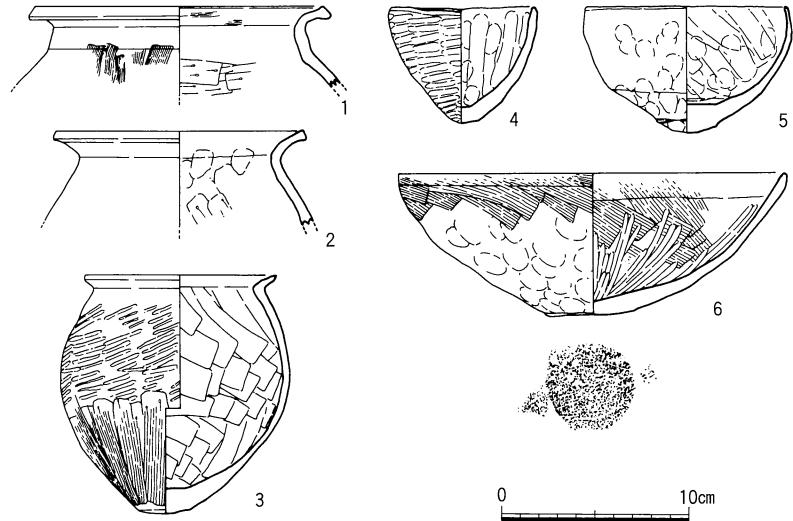
3. まとめ

平成9・10年で発掘調査を実施した横断道原間遺跡及び平成9年に発掘調査を実施した県道原間遺跡の成果を踏まえて、弥生時代の原間遺跡を中心に説明したい。

現在までの調査の結果、原間遺跡のほぼ中央を北上する古川は東の丘陵裾を北東方向に流路を取り、現在の原間池から湊川に流れていたことを確認した。そのため現在の古川によって遺構面が削られてはいるものの、旧の古川の西部分に集落は広がっていたようで、また平成9年県道原間遺跡部分の調査で弥生時代の遺構が希薄になっていることから、横断道原間遺跡で検出した弥生時代の集落が原間遺跡の北限であることが判明した。また、西の丘陵裾には南西部の谷から低地部分が広がることから原間遺跡は南に集落の中心部分があり、北東方向(横断道原間遺跡)に集落が延びるものと想定できる。

今回の原間遺跡は横断道で調査した部分の南側に位置することから、当初より弥生時代の遺構の存在が予想できた。調査の結果からも弥生時代の集落が広がっていることが確認でき、遺構密度も濃くなり、遺構の残存状況も良好になるようである。

古墳時代後期の遺構は土壇墓を検出している。過去の調査ではこの時期の遺構は東西の丘陵裾部に竪穴住居、掘立柱建物などの集落域を検出しているが、今回の調査で地形的にやや高い微高地の中心部分で、土壇墓を検出したということは今後古墳時代の集落を検討する上で重要な資料になるものである。



第12図 S H 02出土遺物実測図(1/4)

IV. 多肥宮尻遺跡

1. 調査の経過

本年度の調査対象地は、平成9・10年度に行った調査の残地4,195㎡である。内訳は、西から平成10年度の未買収地(3,072㎡)、平成9年度Ⅲ区の未買収地(1,123㎡)である。調査前の土地利用状況は、畑地であった。排土処理の関係上、西からⅠ～Ⅲ区に分割して調査を行った。遺跡の立地と環境の詳細は平成9・10年の概報および平成11年刊行の『多肥松林遺跡』報告書を参照されたい。



1. 多肥宮尻遺跡(H.10・11)
2. 多肥宮尻遺跡(H.9・10)
3. 多肥松林遺跡
4. 多肥松林遺跡(高松土木)
5. 多肥松林遺跡(新設高校)
6. 日暮・松林遺跡
7. 凹原遺跡
8. 桜木神社南方散布地
9. 下池遺跡
10. 池ノ内遺跡Ⅱ
11. 宮西・一角遺跡
12. 一角遺跡
13. 空港跡地遺跡
14. 拝師廃寺
15. 上林遺跡

第13図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/25,000)

2. 調査の概要

調査の結果、主な遺構としては高松市が調査した日暮・松林遺跡D区の南端で検出された自然流路SR02の続きと、平成10年度多肥宮尻遺跡のSR9801をそれぞれ検出した。特に、SR9801は弥生時代中期の土器とともに農耕具を中心とする木製品が出土しており注目される。今年度調査を行った範囲に関してはSR01として報告する。

まずSR01であるが、当流路はⅡ区では概ね東西方向に流れているが、Ⅰ区では緩やかにカーブを描いて北方へぬけてゆく。調査区西端では平成10年度調査区Ⅳ区SR04(SR9804)と、調査区東端では平成10年調査区Ⅲ区SR01(SR9801)とそれぞれ接しており、それぞれが同一の流路であることが判明した。流路の南岸の大半が調査区外へ延びるほか、調査区壁体保護のため未調査の部分が存在し、詳細な流路幅は不明であるが、両岸を部分的に検出できたⅠ区では概ね13mを測る(第20図)。深さは最深部で近世遺構面から1.8mを測る。流路底部は東方へ向けて緩やかにあがってゆくが、所々で深みが生じるようである。埋土は茶褐色混礫粘質土を中心とする上層・暗褐色混礫粘質土を中心とする中層・暗オリーブ褐色混礫粘質土を中心とする下層に大別できる。中層は、部分的に



写真Ⅱ Ⅱ区 SR01 (西から)

暗灰色粘質土を中心とする中層の上段・暗褐色粘質土を中心とする中層の下段の2層に細分できる。下層も概ね3段に分離できるようである。ただし、河川の埋没による堆積であるため、場所によって若干堆積状況に変化が認められた。特に、I区においては中層と下層の境に部分的に小児頭大の礫がレンズ状に堆積する箇所が認められたが、II区においては同層の存在は確認できなかった。

さて、当流路中層から下では弥生時代中期中葉から古墳時代後期前半期の遺物が認められる。一部弥生時代中期初頭の遺物が認められるが、これらは混入品で流路の時期をそのまま示しているとは考えられない。流路の上層では遺物は極めて希薄であり、時期の詳細は不明である。

次にSR02であるが、II区南西付近からI区北東隅付近へかけて流れる自然流路である。II区で検出した部分は概ね直流する様相を呈するが、I区へ入るとその向きは大きく北流する。幅は最大約9m、深さは最深部で1.5mを測る。この流路も埋土から大きく上・中・下の各層に分離できる。この流路はI区で調査した際には比較的遺物の出土量が多く認められたが、II区ではその数はかなり減る傾向にあった。これは流路の機能している段階において、遺物の溜まりやすい環境とそうでない環境があったものと考えられる。遺物は大きく彎曲を始めるあたりから明確に出土量が増え、概ねどの層序においても同じ様相を呈する。



写真12 I区 SR02 (北から)

上層は黄灰色混粗砂礫層からなる上段と灰黄色粘性極細砂からなる下段に分離できる。前者は流路のほぼ全面を覆い、遺物はほとんど混入しない。後者は流路の東岸に約10cm前後の厚さで堆積していた。場所によってはこの層の堆積が認められないところもあるようである。この層は中世を主体に遺物が一定量包含されていた。

中層は灰色粘性極細砂層からなる。この層も東岸を中心に、厚さ約15cm前後で堆積していた。あまり多くの遺物は包含されていないものの、古代の遺物が若干検出できた。

下層は暗灰褐色粘性極細砂からなる。この層は流路底部を中心にほぼ全面にわたって堆積しており、遺物の出土量も豊富であった。須恵器・土師器を中心に木製品や木製品の削り屑などが多く出土している。弥生時代中期の遺物が若干混入するが、主体は古墳時代中期末から後期前葉頃のものと考えられる。

各調査区の地山は、I区が灰色礫、II区は北半の微高地が黄灰白色粘質土～黄褐色粘質土、流路肩部から底部にかけては灰色礫、III区は灰色礫からなる。古い層から順に灰色礫層・黄灰白色粘質土・黄褐色粘質土の順で堆積したものと考えられる。大きな目で見ると、やや高いレベルに黄褐色粘質土が堆積していることから、本来調査区全面でこの堆積状況が認められたものが、後世の河川による削平の結果、より低い部分の灰色礫層より上位の層が消失し、灰色礫が露呈したものと考えられる。黄褐色粘質土上面で弥生時代中期初頭の遺構が確認できていることから、同層の堆積時期はそれ以前に求められる。

3. 調査の成果

(1) 弥生時代

II区 SD01

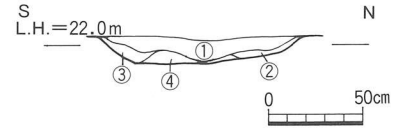
II区北東隅で検出した溝状遺構である。幅1m、深さ0.2mを測る(第14図)。昨年度調査区との境が若干不明瞭であったため、東端を掘り過ぎていたが、東北東の方向から伸びてきたこの溝は途中で「く」の字に折れ、しばらく西進した後再び「く」の字に折れて北側へ抜ける。出土遺物はわずかに弥生土器片が出土した程度であるが、これらの遺物から平成10年度III区で検出されたSD01と同一遺構であると考えられ、所属時期は先年度調査の成果を見ると弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられると想定できる。

II区 SR01下層の下段

同層は暗オリーブ褐色混礫粘質土からなり、流路底部で灰褐色混礫細砂層に漸移する。遺物はこの漸移層付近を中心に出土している。出土状況には粗密があり、I区を中心とする範囲では、遺物は希薄でわずかに弥生時代中期の土器が流路底部から出土しているほか、同層内で広楕状木製品(写真13)を1点検出した程度である。

一方、II区を中心とする範囲では比較的まとまった出土状況を示し、弥生時代中期の土器を主体とし、石器・木製品が混在して出土した。土器は破片がほとんどで、復元可能な状態で出土したものはほとんど皆無である。甕・壺・高坏が主体と考えられる。石器はサヌカイト製のものがほとんどで、わずかに蛇紋岩製の太型蛤刃石斧(第15図-6)、緑泥片岩製の扁平片刃石斧(第15図-7・8)、結晶片岩製石包丁の破片が認められるのみである。サヌカイト製のものは石鏟(第15図-1~4)・石槍・石包丁(第15図-9)・楔形石器が認められるほか、剥片・碎片・石核(第15図-5)などが出土している。木製品は形の分かるものは少なく、鋤・鍬(写真14・15)などの農耕具、石斧の柄・腕などが出土している。ほかに木製品製作時の削り屑や建築部材なども出土している。

流路底部の灰褐色混礫細砂層中にかなりの遺物が入っており、流路として機能していた段階で流れ込んだものと、流路の機能が落ちはじめた段階で流れ込んだものとに分離できる可能性が想定できる。



- ① 褐灰色混礫粘性極細砂
- ② 黄灰褐色細砂
- ③ 灰白色細砂
- ④ 暗褐色混礫粘性極細砂

第14図 II区 SD01土層(1/40)



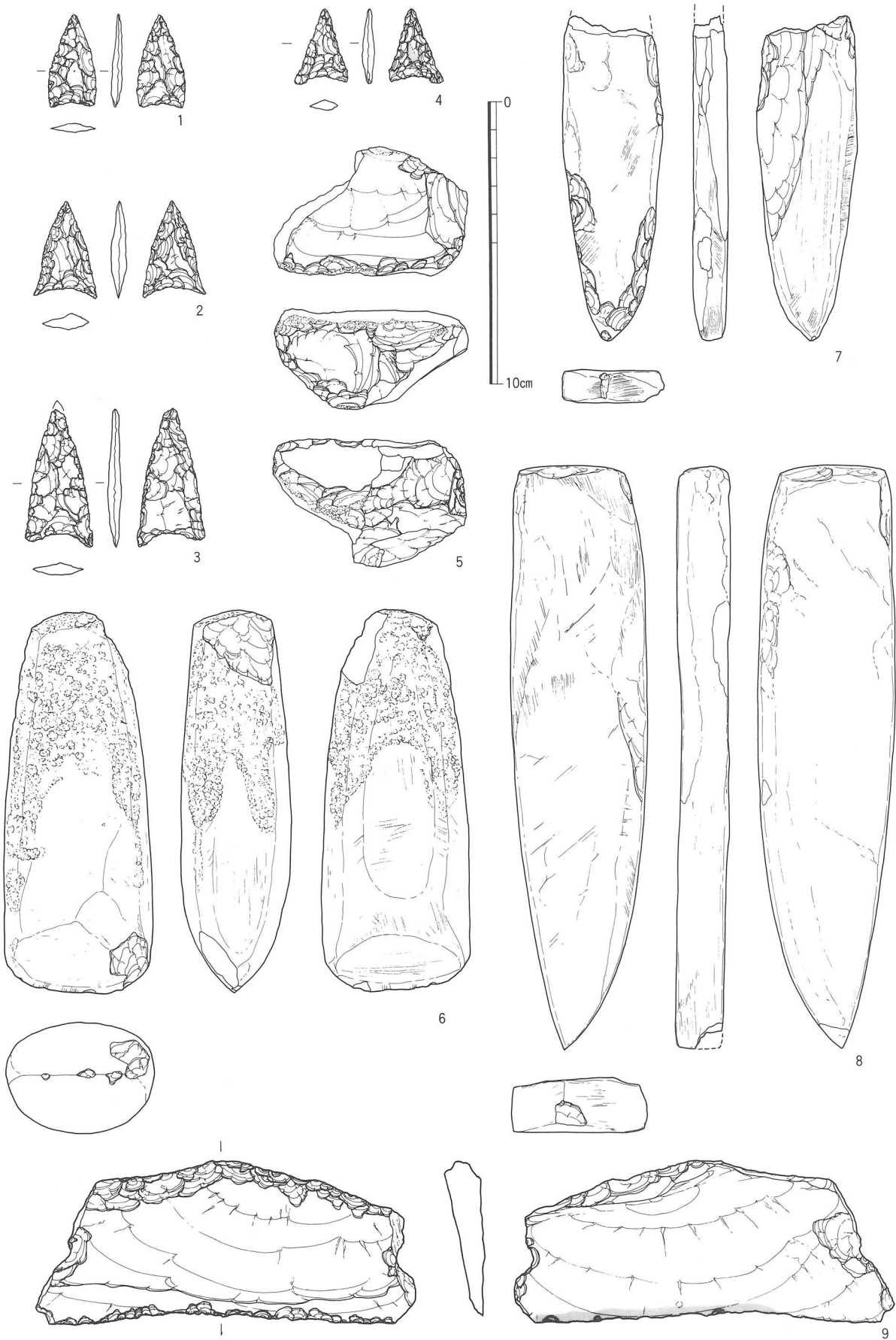
写真13 I区 SR01木製品出土状況①(北から)



写真14 I区 SR01木製品出土状況②(東から)



写真15 I区 SR01木製品出土状況③(北西から)



第15図 II区 S R 01地山直上出土石器 (1/2) (アミ部は磨滅痕)

I区 SR01下層の上段

SR02との交点付近に限られた範囲で堆積した暗灰褐色粘性細砂層からなり、その堆積範囲ほぼ全面に、偏平な涙滴状を呈して土器片が密集した状況で出土した。これらの土器片はいずれも完形率が低く、復元が困難なことから、流路岸から廃棄されたものが堆積作用により見かけ上のまとまりを形成したものと想定できる。甕、壺、器台などからなり、弥生時代後期初頭に位置付けられると想定できる。

(2) 古墳時代

II区 SR01下層の上段

同層は概ね流路全面に堆積した暗褐色粘質土層からなる。わずかに壺が1点出土したのみであり、これから古墳時代前期初頭にその堆積時期が求められる。



II区 SR01中層の下段

この層からも一定量の遺物が出土している。

SR02との交点よりも西側を中心に、流路岸から概ね1.5m前後の所から須恵器坏身(第16図-5・6)蓋(第16図-7)をはじめ、有蓋高坏(第16図-4)甕、土師器坏(第16図-1~3)・甕・高坏が出土している(写真16)。また、建築部材などの木製品その他、大小の砥石などの石製品も若干出土している。土器は比較的完形率が高いものまとまりは散漫で、かつ、同層底部より若干浮いたレベルからの出土が目立つことから、流路岸から廃棄されたものが堆積作用に伴い若干のまとまりを見せた程度であると考えられる。

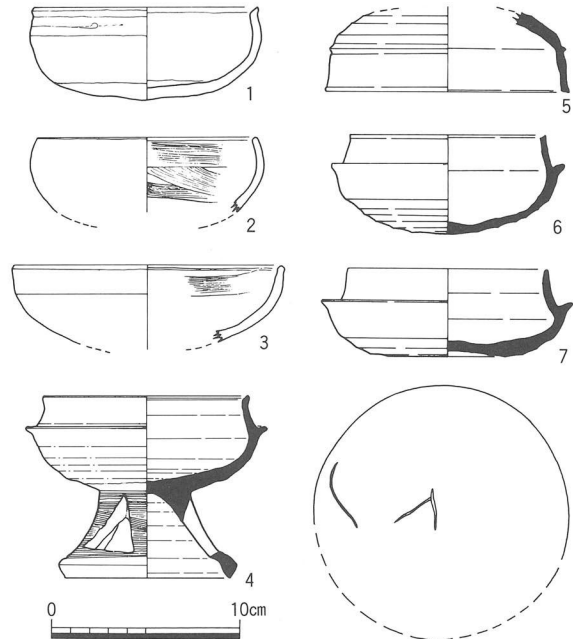
砥石は図示し得なかったが、持ち運ぶには困難な大型品と、垂下して携帯したのと考えられる片方の端部に穿孔を施した小型品が認められた。

出土した須恵器坏の形状から古墳時代中期末の所産であると想定できる。

I区 SR02下層

この層からも比較的まとまった遺物が出土している。出土状況はやや散漫であるものの調査区北壁付近にまとまる傾向にある。須恵器坏身・坏蓋・甕・甗、土師器高坏・甕・甗(写真17)が認められる。図示し得なかったが、この甗はほぼ完全に復元できるうえ、取っ手の接合を貼り付けではなく臍穴を切っておこなっていることが

写真16 II区 SR01中層の下段遺物出土状況(南西から)



第16図 II区 SR01中層の下段出土遺物(1/4)

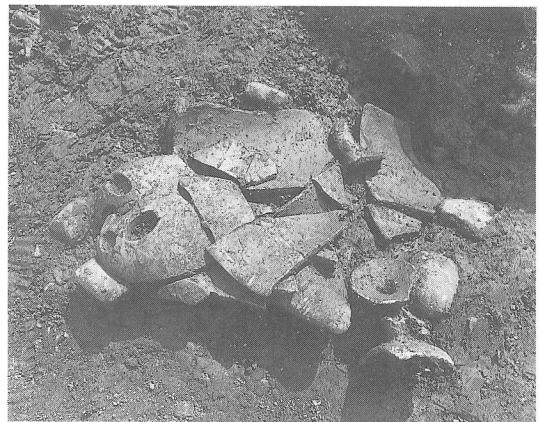


写真17 I区 SR02遺物出土状況①(東から)

わかる好例である。この他に比較的多数の木製品・建築部材片が出土しており、製品は木錘・漕などが認められる(写真18)。

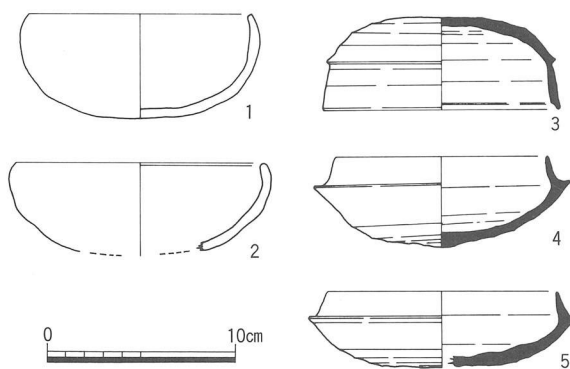
いずれの遺物も同層底部からやや浮いたレベルより出土していることから、流路の埋没過程において少しずつ混入した遺物であると考えられる。出土遺物から古墳時代中期末～後期初頭頃の所産であると想定できる。



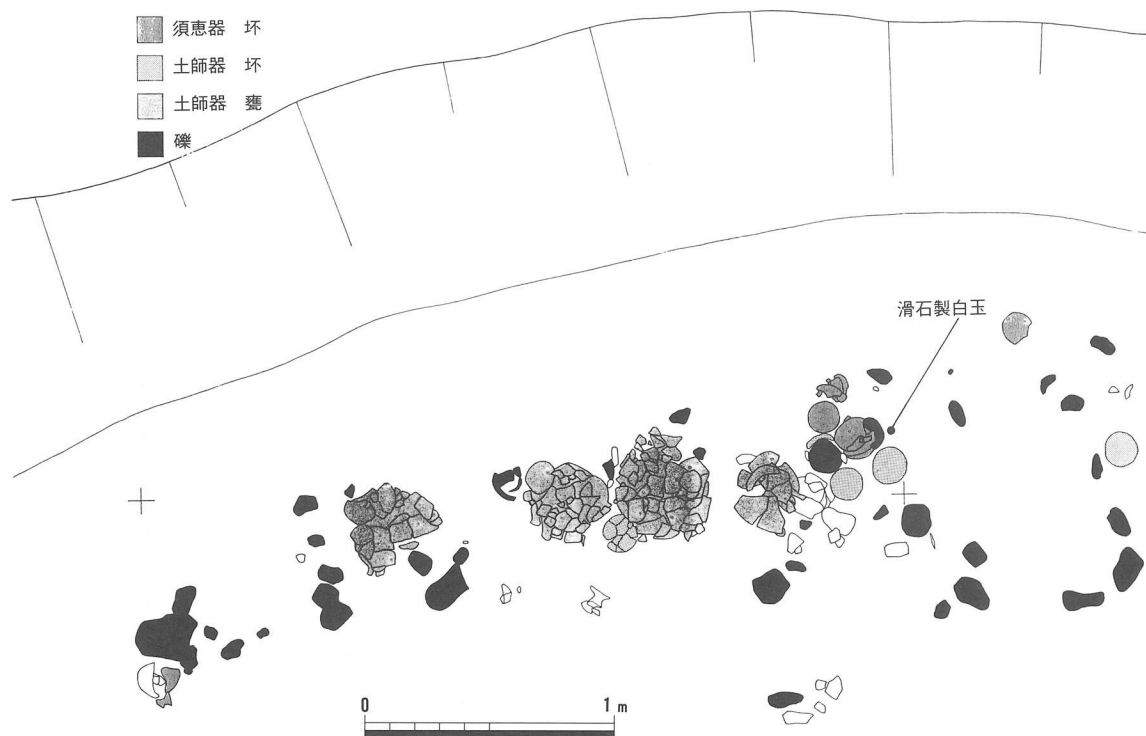
写真18 I区 S R02遺物出土状況②(東から)

II区 S R01中層の上段

この層からも一定量の遺物が出土した。出土位置は中層の下段とほぼ同じ範囲にまとまる傾向にある。土師器・須恵器18個体からなる土器集中箇所を検出した(第18図・写真19)。集中を認める範囲は南北約1m×東西約2mである。器種構成は須恵器坏が6個体(第17図-3~5)・土師器坏が6個体(第17図-1・2)・甕3個体・甑1個体・壺2個体からなる。また、この範囲の中から滑石製白玉が1点出土している。周辺の埋土を検土にかけたが、これ以外に滑石製模造品などの微細遺物は出土していない。



第17図 II区 S R01中層の上段出土遺物(1/4)



第18図 II区 S R01中層の上段遺物出土状況(1/30)

さて、土器の大半は完形率が高く正位を保って出土しているほか、概ね同一レベルに集中し、意図的に重ね置きしたような状況を呈していることから、これらは堆積作用によるまとまりではなく人為的なものであることが想定できる。これらの土器、特に土師器については表面が細かいひび割れに覆われており、調整作業の痕跡が見にくくなっている。この場に置かれた後、しばらく著しい堆積作用を受けず、土器が外気の影響を繰り返し受けたことが想定できる。また、1点のみであるが滑石製白玉の出土を見ることもあわせると、この土器集中箇所は河川祭祀的な性格を持つものと想定できよう。出土した須恵器坏の形状から古墳時代後期前葉の所産であると想定できる。また、漕などの木製品のほか、建築部材と考えられる加工木が若干出土している。

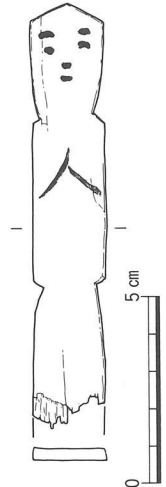


写真19 II区 S R01中層の上段土器集中箇所
(南から)

(3) 奈良時代

I区 S R02中層

この層からはあまり多くの遺物の出土は認められない。特筆すべき点としては、S R01との交点付近やや北寄りの北岸から、削り屑状の木片と共に斎串1点・人形3点が出土した。人形については、うち1点が墨書による人面表現がなされているほか、胸部に「人」字が記されている(第19図)。残り2点には墨書は認められない。いずれも正確な出土位置を記録できなかったが、わずかに古代所産と想定できる須恵器片が共伴することから当該期の所産と想定できる。



第19図 I区 S R02出土人形
(1/2)

(4) 鎌倉時代

II区 S R02上層

この層からもあまり多くの遺物の出土は認められなかった。当流路が北流し始めた東岸に堆積する明黄褐色粘性極細砂から瓦器碗・土師器小皿などが若干出土している。

III区 S R01

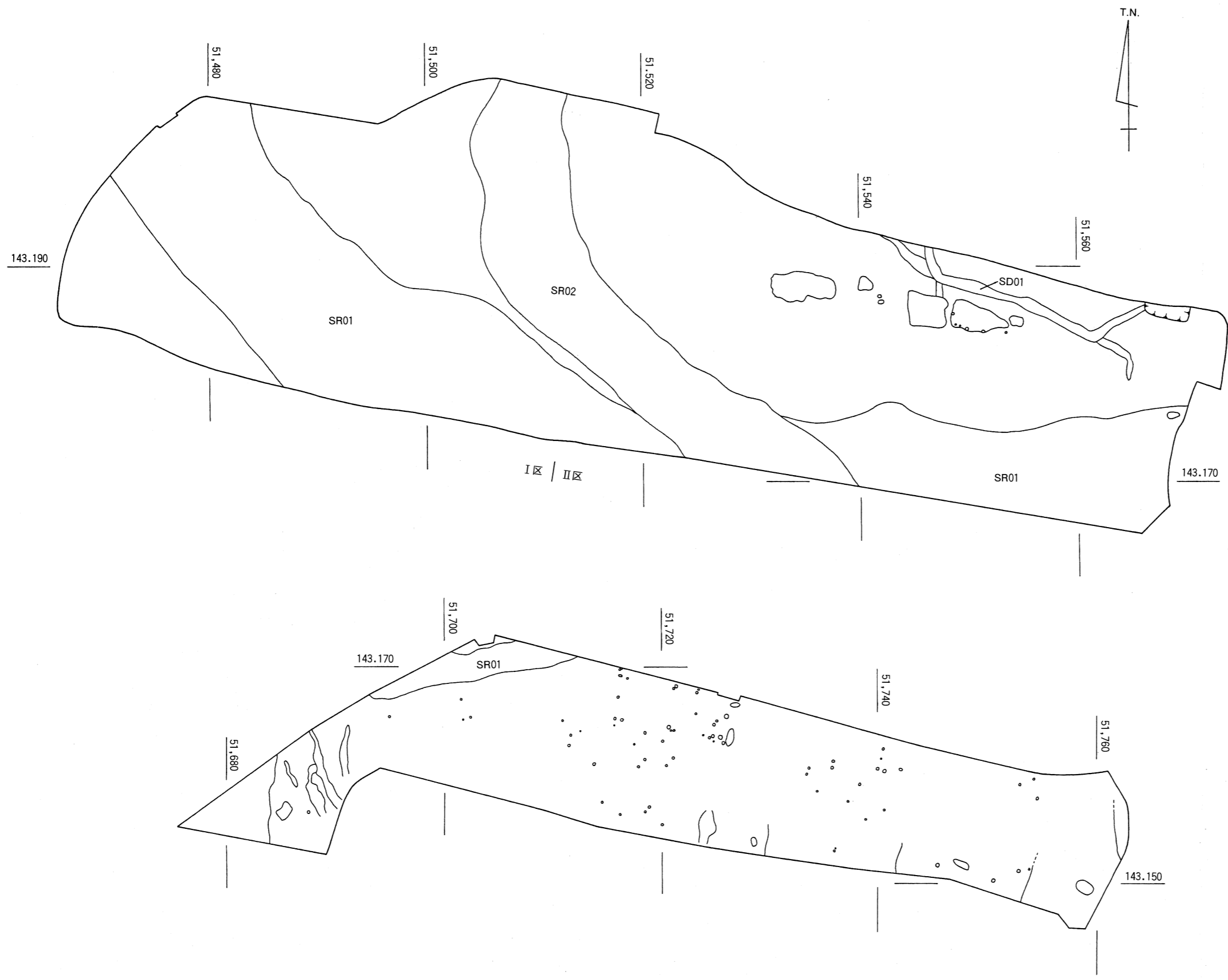
調査区北西隅で検出した東西方向の自然流路である。検出面積が狭いため、詳細な規模は不明であるが、幅約2.5m、深さ0.4mを測る。検出した範囲ではほぼ直流する様相を見せることから、坪界溝の可能性も考えられたが詳細は不明である。

この流路肩底部付近で、わずかではあるが土師器小皿・瓦器碗などが出土している。図示し得なかったが、これらの形状から概ね13世紀頃のものとして想定できる。

この調査区で検出した遺構のほとんどは中世の所産と考えられ、当調査区に南接する平成9年度の調査におい



写真20 III区 遺構完掘状況(西から)



第20図 遺構平面図 (1/400)

ては柱穴の埋土から概ね2時期が想定されている。今回はそれをほぼ追証する結果となっている。

ピットは100基前後検出したが、平成9年度の調査成果とあわせても建物を構成するものは認められなかった。

(5) 近世

I区 SD01

調査区中央付近で検出した溝である(写真21)。日暮松林遺跡で検出されているSD59の延長で箱型の掘り方の中に組み合わせ式の木樋が埋設されており、暗渠として機能し

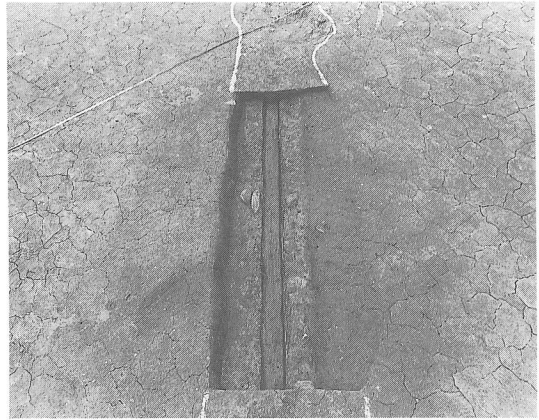


写真21 I区 SD01 (北から)

ていたものと考えられる。木樋の両脇はほぼ1m置きに川原石を添えており、暗渠の固定用に用いられたものと想定できる。この木樋は調査区北側では認められたが、南半分には存在せず、素掘りのまま埋めていたようである。

4. まとめ

今回の多肥宮尻遺跡の調査成果としては既往の調査の追証が出来た点が挙げられる。ここで各時代ごとに簡単に成果をまとめておく。

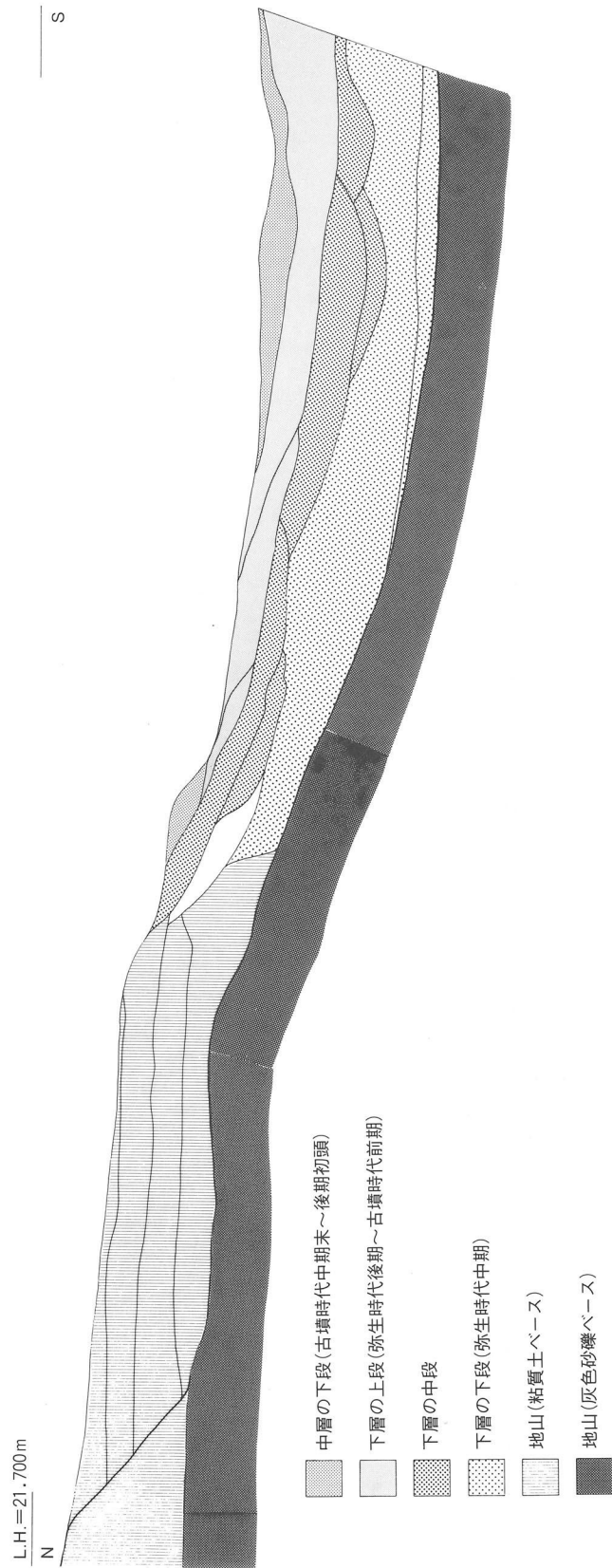
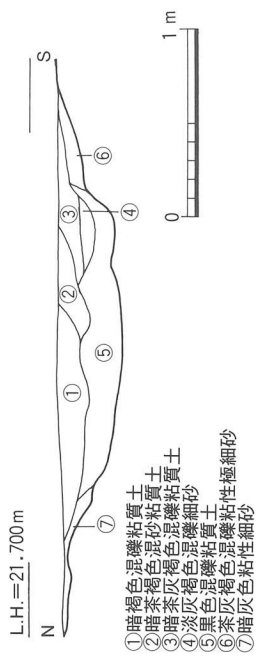
弥生時代 S R01において中期中葉から後期初頭にかけての遺物がまとまって検出できた。両者ともに洪水などの自然堆積によって運ばれてきたものである可能性が高いが、これらの遺物が当該期の土器・石器・木製品の様相の一端を示している可能性があり注目出来る。特に、石器に関してはサヌカイトにおいては石核から製品まで存在し、詳細は不明であるものの、製品の製作過程の一端を窺うことが出来る好例となろう。また、外来の石材を用いた磨製石斧については同一母岩の剝片類が存在しないことから、製品として当遺跡近隣所在の集落へ搬入されたことが窺えよう。また、流路底部の砂礫層中のものと粘質土中のもので時期差が認められるかどうか、破片で出土した土器類が接合可能か、木製品の詳細な組成が判明するかどうかなど、正報告作成時の課題は多い。

古墳時代 S R01・02において中期末から後期前葉までのまとまった土器資料が検出できた。それに伴い、木製品が出土していることから当該期の木製品の様相の一端を窺うことができる。特にS R01中層の下段から出土した中期末から後期初頭のもは、当遺跡近隣の集落から廃棄されたか、洪水などで流れ込んだものである可能性が高いが、概ね一形式の範囲内に収まるものと想定できる。同様に中層の上段から出土した後期前葉のもはと想定できる土器群は一括性が高いものと想定でき、両者ともに県下における当該期の土器を研究する上で良好な資料になるものと想定できる。

奈良時代 S R02において若干の遺物の出土が見られるのみにとどまるが、人形・斎串といったいわゆる律令的祭祀関連の遺物が出土している。平成7年度の多肥・松林遺跡の調査で墨書土器の出土が認められていることから、これらの成果とも合わせると、今後当該期における遺跡周辺の歴史的環境に考察の焦点が絞られよう。

残念ながら、今回の調査においては竪穴住居跡・掘立柱建物といった生活関連遺構はほとんど検出できなかったが、自然流路中から各時代における遺物が、概ね層ごとに取り上げることが出来た。中にはS R01中層の上段のように、原位置を概ねとどめたままと想定できる遺物のまとまりも存在し、当遺跡

の比較的近隣において集落が営まれていたことが想定できる。特に、当遺跡北方において、狭いながらも旧地形が遺存していると想定できる微高地が認められることから、この範囲に集落の存在が想定できる。



V. 須田・中尾瀬遺跡

1. 立地と環境

須田・中尾瀬遺跡、尾の上遺跡、本村中遺跡の地理的環境と歴史的環境をまとめて概観する。

3遺跡は、荘内半島の付け根にある通称妙見山の東麓に所在する。須田・中尾瀬遺跡と尾の上遺跡が丘陵から平地へと地形が大きく変化する急斜面に立地するのに対して、本村中遺跡は丘陵の末端から距離を隔てた平地内の緩斜面に立地している。

3遺跡の所在地に近い現在の詫間町の中心街の大部分が、海浜を埋め立てることによって形成されていることを考えると、各遺跡ともに旧海岸線まではかなり近い場所に立地していたことが推測できる。

さて、島嶼部を含む荘内半島周辺地域については、縄文時代早期の小島貝塚、同前期の南草木遺跡、同後期の箱遺跡、大浜遺跡、船越遺跡、蟻の首遺跡、東風浜遺跡、西浜遺跡等が知られていることから、香川県下における縄文時代の遺跡の分布密度が特に高い地域としての特徴をみることができる。

ところが、調査の結果は当該地域の縄文時代の遺跡に複合遺跡としての性格を有する遺跡が含まれることを明らかにしたことから、今後は複数の時期にわたる歴史的環境の考察が可能になったと言える。

2. 調査の成果

(1) 調査の方法

対象地全体を地形的条件を考慮することにより、4区画（「I区」～「IV区」）に分割した。

調査は最も遺物包含層が厚く堆積していることが予測されていたI区から着手し、その後は掘削土の仮置き場所を確保する必要上、IV区、II区、III区の順序で進めた。

調査の方式としては、対象地が急勾配の傾斜地であるとともに、狭小な面積であるにもかかわらず、深く掘削する必要があり、安全管理が特に重要視されたことから工事請負方式を採用した。

(2) 遺構の検出状態

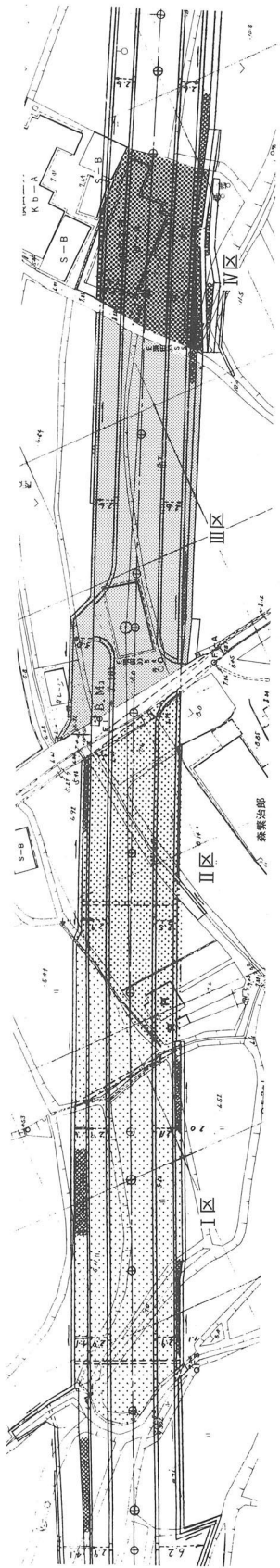
対象地は現状における地形的条件から、谷部（I・II区）と尾根部（III・IV区）に大別することができるが、検出した遺構の内容についても各々に2分することができることが判明した。

すなわち、前者の大部分は縄文時代後期から近・現代まで断続的に埋積を繰り返したことが明らかになった自然河川跡が占めており、底面周辺において堅果類が遺存する土坑12基を検出することができた。後者は鎌倉時代を中心とする集落跡であり、柱穴跡、土坑、溝状遺構を検出している。さらにIV区においては江戸時代の遺構の存在をも確認することができた。



- | | |
|------------|----------|
| 1 須田・中尾瀬遺跡 | 7 船越遺跡 |
| 2 尾の上遺跡 | 8 大浜遺跡 |
| 3 本村中遺跡 | 9 小島島貝塚 |
| 4 東風浜遺跡 | 10 南草木遺跡 |
| 5 西浜遺跡 | 11 蟻の首遺跡 |
| 6 箱遺跡 | |

第23図 遺跡位置図（1/135,000）



第24図 調査地区割図 (1/1,000)

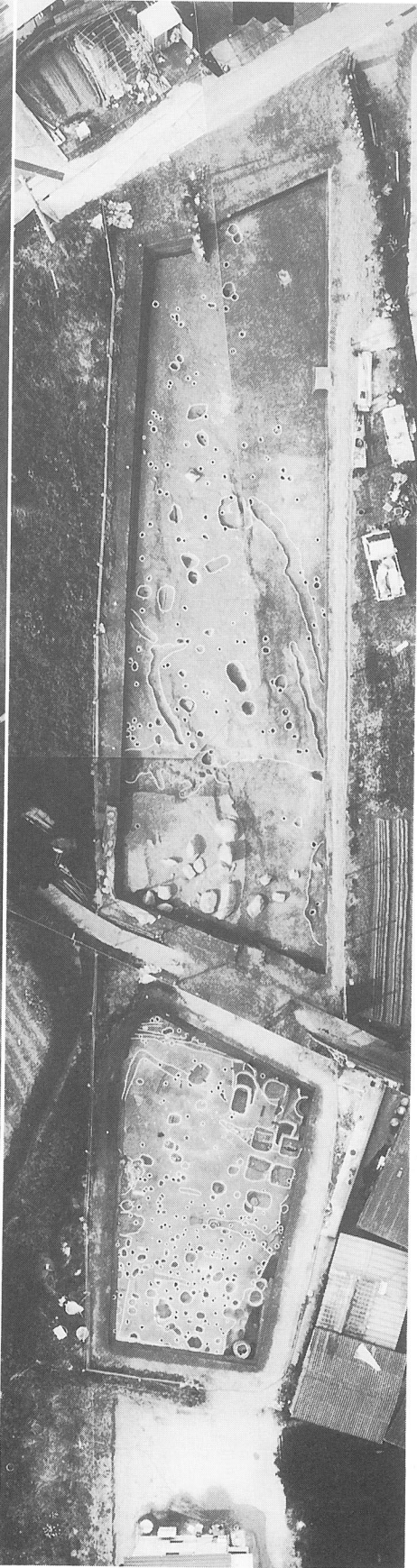


写真22 調査地全景

(3) 遺構と遺物

縄文時代

I区中央部では最深部の深さが4mを超える自然河川跡を検出した。南側丘陵部から海にむけて北流した解析谷跡と考えられ、この旧流路部分からは縄文時代後期を中心とする多量の縄文土器、打製石鏃、打製石匙、打製石斧等のサヌカイト製石器、同剥片が多数出土した。この他には灰白色の姫島産と考えられる黒曜石の剥片が出土している。また、流路東側部分から結晶片岩製の石器片3点が出土した。これらは直径約40cmのドーナツ状の石器に復元が可能である。流路底面周辺において、ドングリ主体の堅果類を包含した土坑12基を検出した。その平面形態は円形から楕円形で、直径が約50cmの遺構2基、80cm前後の遺構9基、1m以上の遺構1基である。

弥生時代・古墳時代

自然河川跡から、弥生時代前期の甕形土器を含む弥生土器、打製石鏃、打製石庖丁、同後期の壺形土器、甕形土器、製塩土器、古墳時代の坏、高坏、礎等の須恵器、土師器、管状土錘が出土している。

古 代

自然河川跡は7世紀段階までは流水堆積が顕著であるが、同時期以降はシルトから粘土の水平堆積に移行し、比較的穏やかな環境下での堆積へと推移している。同時に遺物量も大幅に減少している。この段階では、須恵器、土師器に加え、黒色土器がみられる。

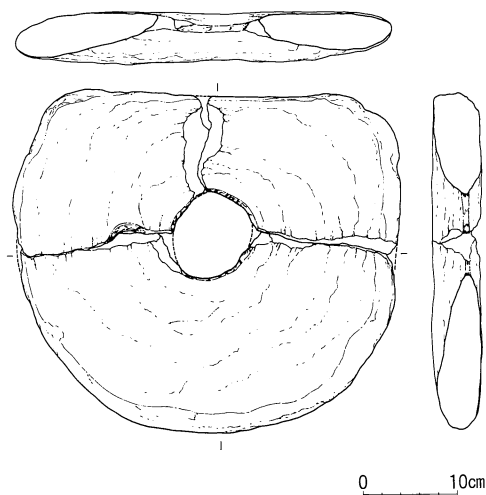
中世・近世

I区西部では整地層とみられる堆積層、I区東部では畦畔状遺構、II区では柱穴跡、III区では溝状遺溝、IV区では全域で中世から近世にかけての屋敷跡と推定される遺構を検出した。遺物には土師器、輸入磁器、備前焼、東播系須恵器、管状土錘、銅銭等がある。

3. まとめ

自然河川跡の底面周辺において検出された堅果類の遺体が遺存する土坑については、近年九州地方を中心として「水場」において検出される堅果類の貯蔵遺構に類似すると考えられる。今後は遺体の同定作業、埋没状態の比較作業等を経ることにより遺構の性格を決定することができると考えている。

また、同河川跡から出土した多量の縄文土器と石器・石製品類は、当該地域における縄文時代後期を中心とした時期の土器編年の確立と、生業の様相の解明の重要な資料となることが期待できる。



第25図 不明石製品実測図 (1/8)



写真23 I区 (西から)

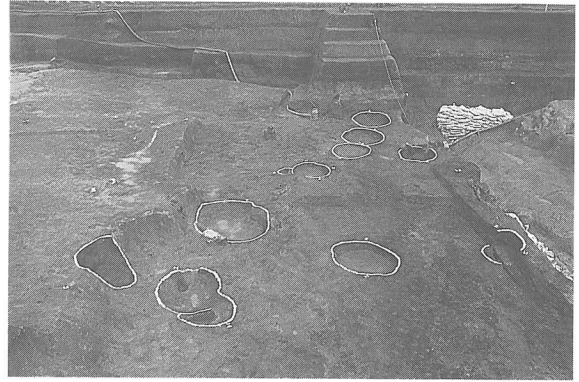


写真24 堅果類出土土坑群 (南から)

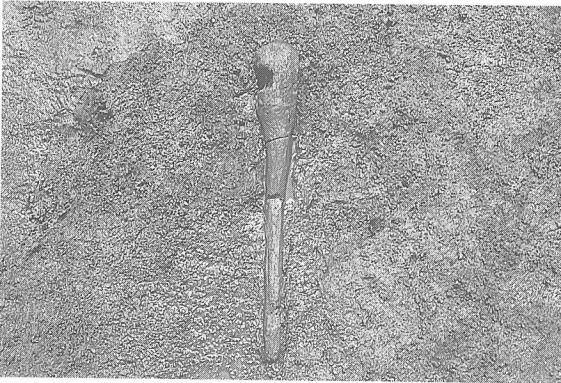


写真25 石斧柄出土状況 (西から)

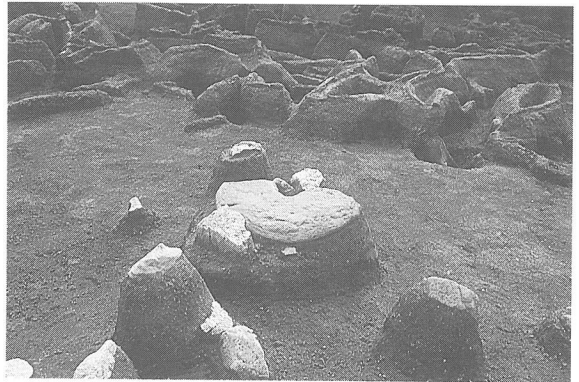


写真26 不明石製品出土状態 (東から)



写真27 III区 (北部) (東から)

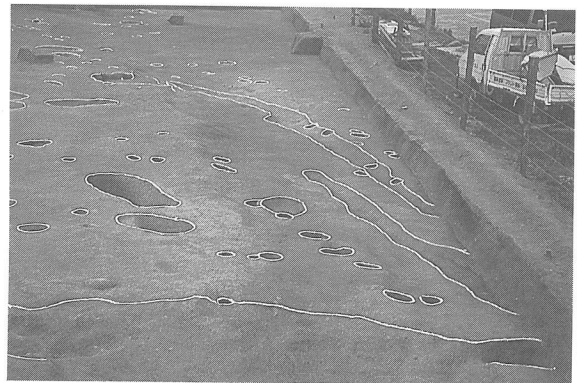


写真28 III区 (南) (東から)



写真29 III区 (東から)



写真30 IV区 (西から)

VI. 尾の上遺跡

1. 調査の成果

(1) 遺構の検出状態

丘陵の裾部において、溝状遺構と自然河川跡を検出した。前者については遺存状態が悪化しているが、規格的な平面形態を示すことがわかる。後者の埋積土中から採取された遺物には、サヌカイトの破片、土師器、陶磁器等が混在することから、近世以降の短期間に埋没したことが推測できる。

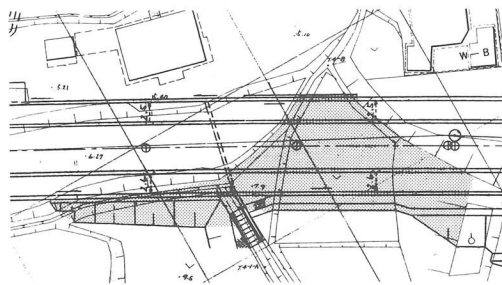
(2) 遺構と遺物

調査区西端部において幅約10.1m、深さ約2.9mを測る自然河川跡を検出し、縄文時代から近世までの各時代の遺物を確認した。主な遺物は縄文時代～弥生時代の土器類、打製石匙、打製石鏃、打製石庖丁、打製石錐等のサヌカイト製石器、古代の土師器、須恵器、中世の土師器、東播系須恵器、備前焼、輸入磁器、銅銭である。

2. まとめ

対象地の大部分が自然河川跡で占められているために、遺跡の性格付けが難しいが、同河川跡が近世頃まで存在していた事実から、当該地の旧地形が急勾配の斜面地であったことが判明した。すなわち、居住遺構を検出することができなかった原因がこの点にあると考えられる。

丘陵裾部に開削された溝状遺構についても、上記の旧地形を前提にすると農業用水路としての性格を与えることは慎重になる必要があると考えている。



第26図 調査位置図 (1/1,000)



写真31 調査地全景



写真32 遺構検出状態 (西から)



写真33 自然河川跡 (南から)

Ⅶ. 本村中遺跡

1. 調査の成果

(1) 遺構の検出状態

次年度以降に調査を行うこととした箇所を除いて、全域において遺構面が2面あることが判明した。上位の遺構面は、耕作土の除去後に検出することができ、ほぼ東西の方向性を示す溝状遺構を検出した。また下位の遺構面は、基盤土の上面に相当しており、土坑を中心とする内容である。

(2) 遺構と遺物

上位の遺構面の遺構としては、調査区東半部において中世の自然流路群を、西半部において中世後半から近世の遺構と考えられる耕作痕を検出した。

下位の遺構面においては、縄文時代から弥生時代の土器を包含する土坑を検出した。

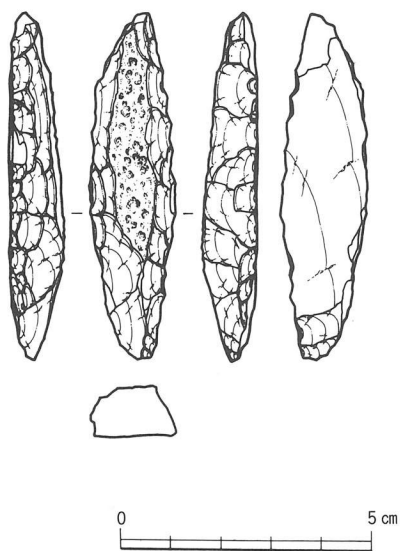
遺物包含層からはサヌカイト製の打製石鏃とサヌカイト剥片が出土している。

また、耕作土直下の床土層からサヌカイト製角錐状石器が1点出土した。長さ6.9cmを測り、主として、周縁部に腹面方向からの加工が施されている。全体的にローリングを受けており、後世の流入とみられる。

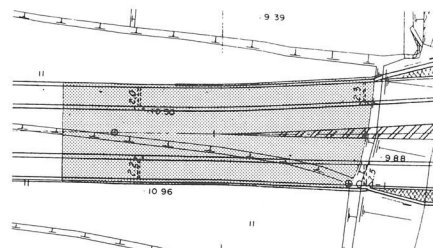
2. まとめ

旧状においても小河川への傾斜地に立地していたことが想定できることから、集落跡の存在を予測することは難しいと考えられる。

角錐状石器の出土により、当該時期の遺跡の存在を予測させる成果が得られた。



第28図 角錐状石器実測図 (2 / 3)



第27図 調査位置図 (1 / 1,000)

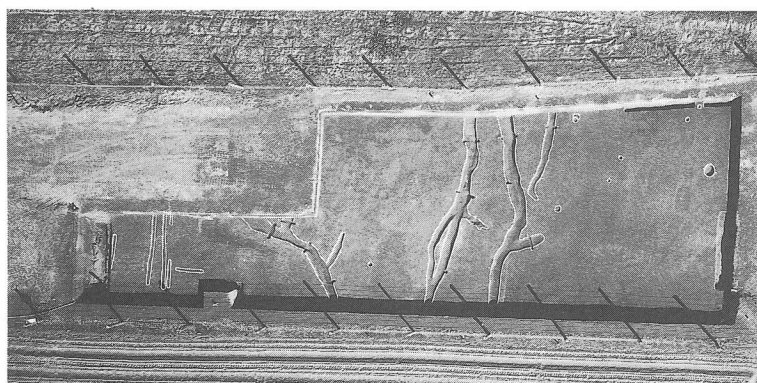


写真34 調査地全景



写真35 遺構検出状態 (西から)

Ⅷ. 田村遺跡

1. 立地と環境

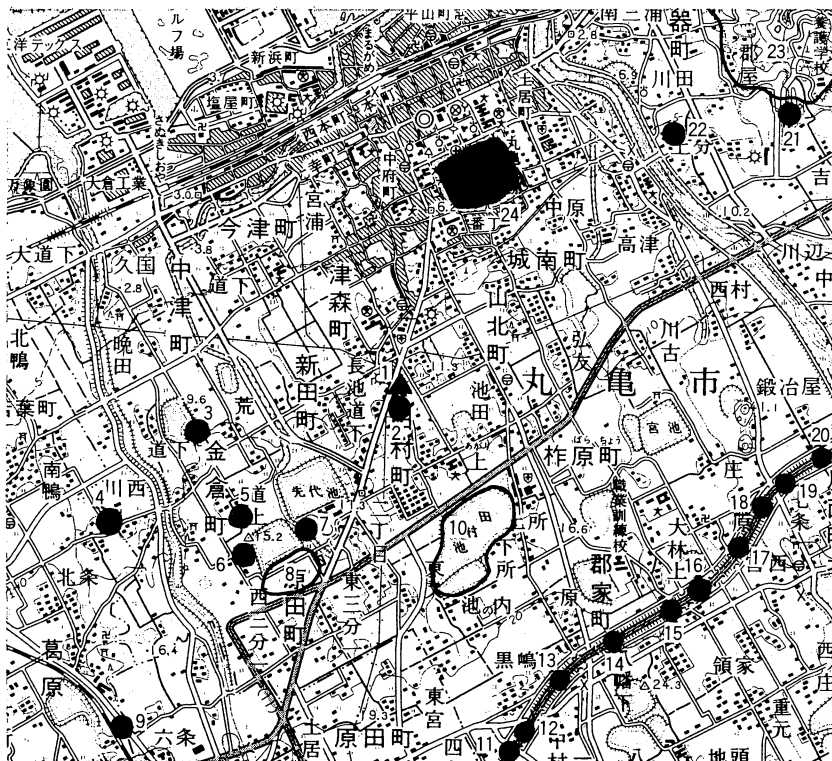
田村遺跡は、丸亀市田村町に所在する。丸亀平野のほぼ中央部、やや海岸線寄りで緩扇状地上にあたる。周囲には条里地割の名残である方格地割が比較的良好に見られる水田が広がるが、現在は店舗などの建物が次々と建てられ、都市化が著しく進んでいる地域でもある。また、温暖で降水量の少ない気候を反映して、水田に使用する水を蓄えた溜め池が多数見られる。

当該地の周囲には、これまでの調査の少なさを反映したためだろうか、周知の遺跡はあまりみられない。当該地南西やや離れたところに弥生時代前期の環濠集落である中の池遺跡や、弥生時代を中心とする集落遺跡の平池南遺跡などがある。また、北東には美しい扇の勾配を持った石垣で知られる丸亀城跡が存在している。

当該地のすぐ南側は、白鳳時代から平安時代にかけての瓦が多数出土している田村廃寺が位置している。発掘調査が行われていないためその詳細は不明であるが、明治35年頃に塔の心礎が掘り出されており現在は当該地南西の番神宮の境内に移されている。また、「塔の本」や「塔の前」、「ゴンゴン堂」など、寺に関係するような地名が残っており瓦の出土の状況と合わせて方一町の寺域が推定されている。

2. 調査の成果

調査は、県道33号線高松丸亀線の拡幅工事に伴い調査面積650m²を対象として、2ヶ月間の調査期間で実施した。



第29図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

番号	遺跡名
1	田村遺跡
2	田村廃寺
3	道下遺跡
4	金倉城跡
5	中の池遺跡
6	平池西遺跡
7	平池東遺跡
8	平池南遺跡
9	小塚遺跡
10	田村池遺跡
11	三条番ノ原遺跡
12	三条黒島遺跡
13	郡家原遺跡
14	郡家一里屋遺跡
15	郡家大林上遺跡
16	郡家田代遺跡
17	川西北原遺跡
18	川西北七条I遺跡
19	川西北七条II遺跡
20	川西北鍛冶屋遺跡
21	吉岡神社古墳
22	青ノ山城跡
23	青ノ山古墳群
24	丸亀城跡



第30図 調査区配置図と周辺の地形 (1/5,000)

調査対象地は、幅約7m、長さ約100mと長狭な形状を呈しており、ほぼ中央付近で銀行への進入路で南北に分断されている。このため、進入路を境にそれぞれを北区・南区と呼称して調査区を設定し、調査を行った。北区はその北半部分にかつてガソリンスタンドが建っており、地下に設けられたガソリン貯蔵庫などによって遺構面よりも深く攪乱が及んでいたので、遺構はほとんど残っていない。南半部も家屋の撤去に伴って廃材を燃やした攪乱坑が複数見られ、それらの隙間でかろうじて遺構を検出している。土器細片しか出土していないため時期ははっきりしないが、溝状遺構や柱穴などがある。また、南端付近には古代から中世の土器片を含んだ包含層を確認している。これに対して南区では、南端部分に巨大なコンクリートの基礎が見られる以外は比較的良好な形で遺構を検出している。検出

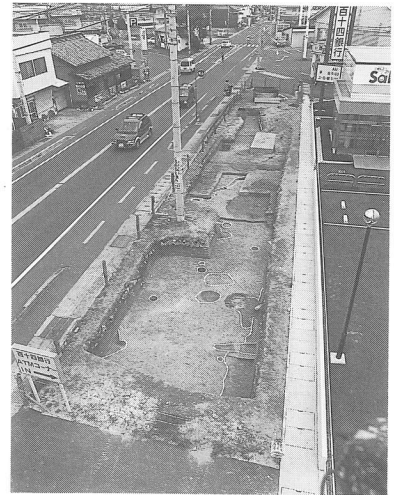


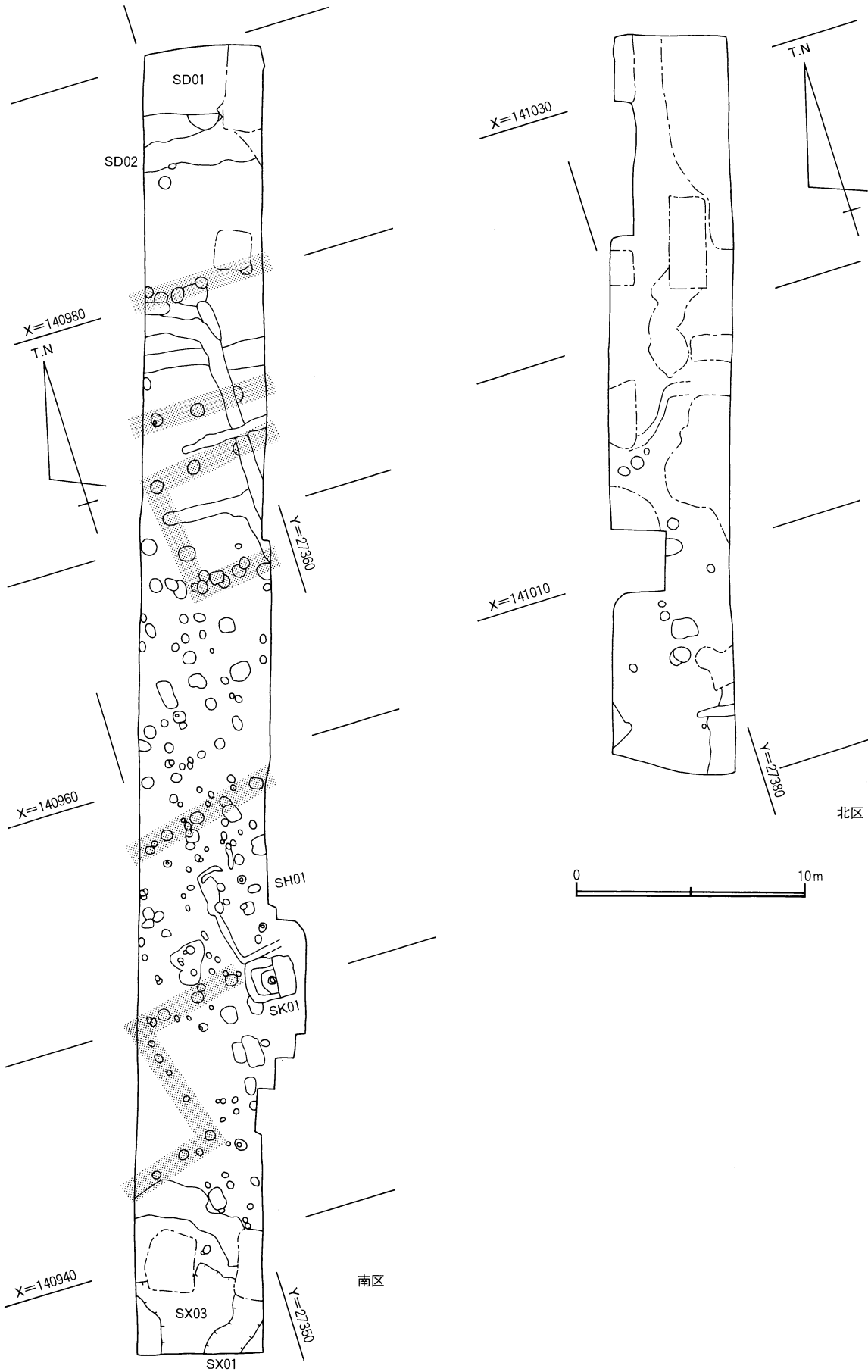
写真36 北区全景 (南西から)



写真37 南区南半全景 (北東から)



写真38 南区中央部 (南東から)



第31図 遺構配置図 (1/250)



写真39 S X 01・03遺物出土状況（南西から）

した遺構としては、溝状遺構、柱穴、土坑、竪穴住居跡、梵鐘鑄造土坑などがあるが、南端付近の弥生時代の溝状遺構1条と時期不明の竪穴住居跡を除いてはすべて古代から中世の遺構である。多数検出した柱穴には平面が円形や隅丸方形のものがあり、柱の痕跡を残すものもみられる。中には掘立柱建物や柵列状に並んでいるものも認められるが、調査区の幅が狭くそれらの全体像が判明しているものはない。その方向は概ね正方位に合致するものとやや西に偏るものの2つがみられるようである。また、規模からも大・小に2分することが可能であるが、遺物がほとんど出

土していないため、これらが時期差を表しているかどうかははっきりしない。竪穴住居跡（SH01）は著しい削平を受けており、わずかに壁溝の痕跡を確認したにすぎない。東半部は調査区外のためわからないが、南・西・北の一部の壁溝を検出している。周囲には柱穴が多く存在しており、明確にこの竪穴住居跡に伴う柱穴は判明していない。壁溝の北辺が途切れており、竈の存在を期待したが、地面に被熱痕等は認められず確認できなかった。調査区の南端で浅い窪地状の落ち込みを検出した（SX01・03）。その中からは多数の割れた平瓦片とともに、多量のスサ入り粘土塊が出土した。SX01はそれらに加えて焼土塊や微量の炭が含まれている。土層断面観察からはSX03堆積後にSX01が堆積していることが判明している。粘土塊には内面が熔けてガラス質状の光沢を持つものがみられ、後述する梵鐘鑄造に用いられた溶解炉の破片である可能性が極めて高い。また、高熱を受けて一部が発泡した平瓦片や、丸瓦内面の布圧痕をスタンプのように踏み返したスサ入り粘土塊がみられることから、溶解炉の一部には瓦を使用していたことがうかがえる。ともに土器片をほとんど含んでいないため詳細な時期は判明していないが、落ち込み底面に被熱の痕跡が認められないことから、梵鐘鑄造などに用いられた溶解炉などを最終的に廃棄した落ち込みと判断できる。

この他の特筆すべき遺構として、梵鐘鑄造土坑（SK01）や築地塀の雨落ち溝と思われる溝状遺構（SD02）がある。続いてこれらについて詳述する。

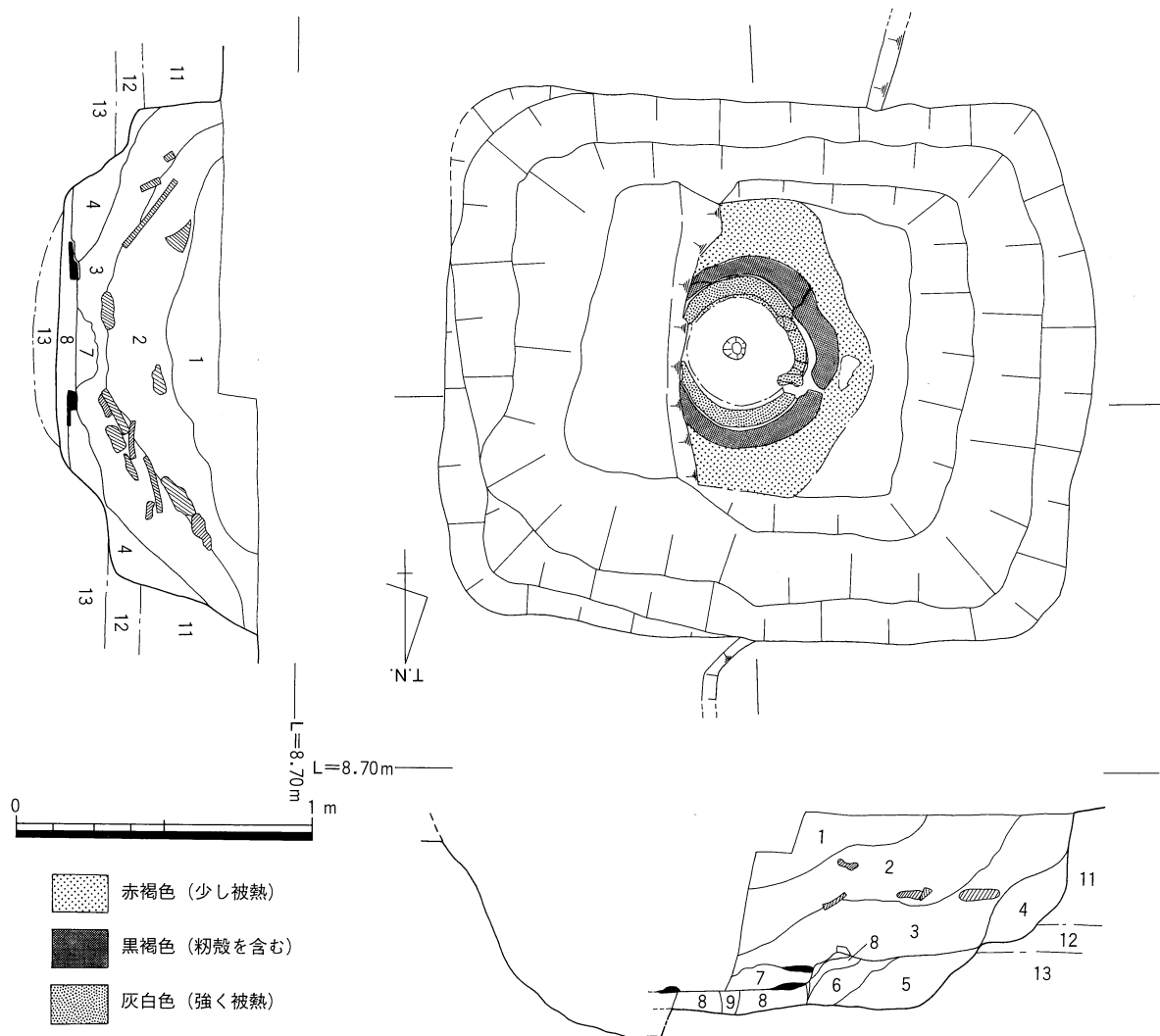
梵鐘鑄造土坑（SK01）

平成10年度の香川県教育委員会文化行政課の調査で東半分完掘されたもので、その際に銅滴や梵鐘鑄型片が出土したことから梵鐘鑄造土坑と推定されていた。南北1.8m、東西2.2mの隅丸正方形で、上部を削平されているが現状で深さ65cmを測る。土坑の方位は概ね正方位と合致していることができそうである。土坑は途中で小さなテラス面を持った2段掘り込みになっており、底面はベース層（浅黄色粘土層）を掘り抜いて下位の緑灰色砂礫層まで達している。底面のほぼ中央部に非常にきめの細かい粘土を用いて、直径約60cmの円形の底型を作っている。底型の上面はほぼ水平にされており、挽き型を使用して整形した可能性が高い。底型上面は内側から順に被熱痕の見られない生粘土、直接湯と接し灰白色に焼



写真40 SK01遺物出土状況（南東から）

けてしまった部分、籾殻を多く含んでおり黒化した部分、比較的低温の被熱で赤変した部分となっている。ほぼ中央部に目の細かな砂を充填した穴が穿たれており、ガス抜きを目的としたものと思われるが、底型や内型を挽く際の鳥目の受けを兼ねている可能性もある。底型の上面にはかすかに擦痕が認められる箇所もあることや、底型の周囲の土層には若干の炭を含んだ層が認められることから、この場で中子を乾燥させるために火を焚いた可能性が高く、これらのことから梵鐘鑄型の造形方法は「挽型法挽中子式」であったと思われる。底型と中子の固定方法は近世の例のように補強の筋金などを用いないものであったと想定される。中子に外型をかぶせた後、通常は鑄型の上下に渡した掛木を締縄できつく縛り固定するが、本鑄造土坑では底型下位に掛木の痕跡は認められず、鑄型設置後に土坑を埋め戻すことによって鑄型の固定を行ったものであろう。同様の固定方法は7世紀代の滋賀県・木瓜原遺跡例でもみられ、また、8世紀末から9世紀初頭の大分県・豊後国分寺例では掛木を用いた上にさらに埋め戻しも行って固定を行っている。



第32図 S K 01平・断面図 (1/25)

この後に湯（溶かした青銅）を流し込む「鑄込み」を行う。おそらく梵鐘鑄造土坑のすぐ近辺に溶解炉を設置して樋などを使って流し込んだと思われるが、調査区外の東側を除いて周辺に炉を据えるための土坑や地面の被熱痕などは、削平を受けている影響もあってか見つからなかった。

流し込んだ湯（溶かした銅）が冷えた後に、梵鐘を取り出す作業を行うわけだが、この際に鑄造土坑を再度掘り直した坑（搬出坑）も検出することができた。搬出坑は割と大きめに掘られており、底型上面の西側部分が大きく盛り上がり崩れている。この状況から判断すると、外型を割りながら梵鐘を露わにして、最終的には東側に大きく横倒しにして引っ張り上げて取り出したことがわかる。

その後は土坑を埋め戻しており、その際に周囲にあった瓦や石が土坑内に入れられている。瓦や石が土坑中央に向かって斜めになっている状況がそれをよく表している。埋め戻した土からはそのほかに梵鐘鑄型（おそらく外型と思われる）の細片や銅滴・銅滓、粘土小塊などが出土している。埋め戻した土を含めて本土坑から出土している土器片は細片で微量であり、年代の判明するものはみられない。ただ、土坑の最上層の埋土（色・質とも下層と異なり、鑄型片や粘土小塊を一切含まない土層）の中から十二葉細弁蓮華文軒丸瓦（実測図1）が1点出土している。素弁の一部に範傷が認められ、過去に田村廃寺で採取されている瓦の中で2点と同範であることが判明している。瓦の年代は平安時代中頃から後半とされており、この堆積を埋め戻しの最終埋土とみるか、本土坑とは異なる遺構の埋土とみるか、今のところ判断する根拠はない。現在、残留磁化測定と炭化材の放射性炭素測定を行っており、その結果を踏まえて再検討を行わなければならないが、現段階では奈良時代から平安時代の梵鐘鑄造土坑としておきたい。

溝状遺構（S D02）

南区の北端で検出した溝状遺構である。検出長4.8m、最大幅1.6m、深さ20cmを図り、方向は正方位東西方向に合致している。断面の形状は概ねU字形を呈しているが、南側より北側の立ち上がりの方がきつい傾斜となっている。溝状遺構の内部からは多量の平瓦・丸瓦片が拳大の垂円礫とともに出土しており、わずかではあるが土器片も認められる。図化した須恵器類（実測番号7～9）はいずれ



写真41 S K 01完掘状況（南から）



写真42 S K 01底型検出状況（南東から）



写真43 S K 01底型断ち割り（北東から）

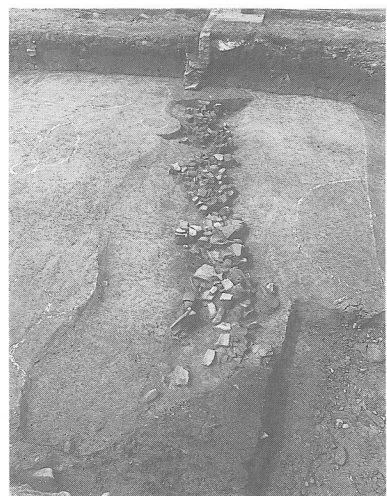
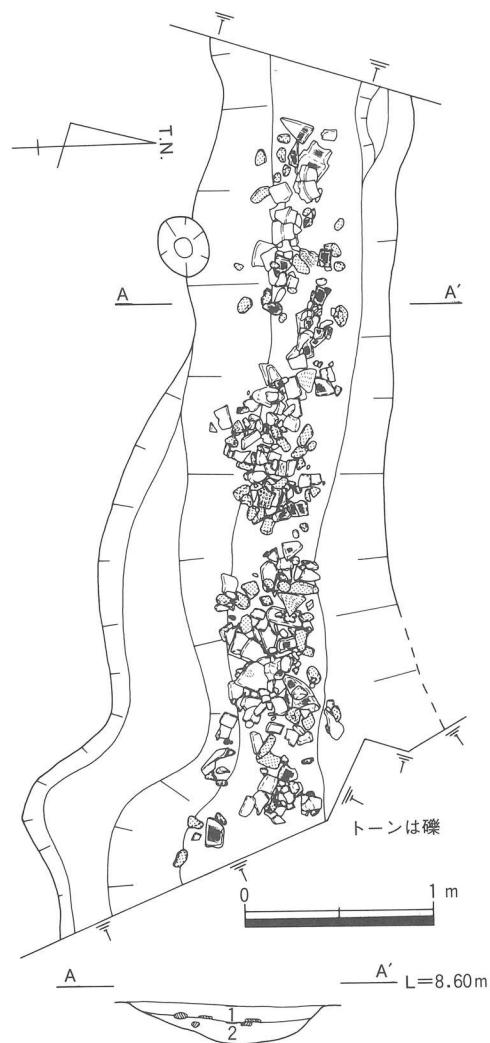


写真44 S D 02遺物出土状況（東から）

も7世紀後半から8世紀代のものである。中でも8の高坏は瓦の下位から出土している。S D02のすぐ北側に位置するのが溝状遺構S D01である。検出長3.0m、幅2.8m、深さ40cmの規模で、断面の形状は緩やかなU字形を呈している。調査区が狭いため、現状ではS D02とほぼ平行しているようにみえる。埋土からは古代から中世にかけての土器片が出土しているが、S D02とは時期差を有しており、S D02埋没後に穿たれたものと思われる。というのは、S D01調査中に北よりの部分で瓦が列をなすように出土しておりS D01の最下層（S D01第3層）として取り上げたが、補足のトレンチ調査でS D01設置以前に小規模な溝状遺構が存在していたことが判明したからである。これらの瓦片はその溝状遺構に伴うものと思われ、さらにこの溝状遺構はS D02と3.6mの間隔でほぼ平行しているものである。この溝状遺構を境にして、北と南で遺構のあり方（特に柱穴）が全く異なっており、何らかの意味を持つ区画の溝状遺構であると考えられる。南側には柱穴が集中しており、梵鐘鑄造土坑は寺域内で伽藍の外側に築かれることが多いことを考えると寺域の北限を区画するものと想定されるのである。溝状遺構に挟まれた部分には杭列や柱穴は認められないが、小規模な築地塀であればそれらは必要ないであろう。2条の平行する溝状遺構は、この築地塀に伴う雨落ち溝であったと理解することができよう。



1. 褐灰色混細砂質土(5YR5/1)
2. 褐灰色混細砂質土(5YR4/1)

第33図 S D02平・断面図(1/40)

主な出土遺物

2はS D01の下位で確認した溝状遺構から出土した白鳳期の川原寺式の系譜を持つ軒丸瓦瓦当である。3は土坑から出土した川原寺式系譜の軒丸瓦瓦当破片である。4はS X03から出土した唯一の軒丸瓦瓦当小片である。5・6はS D02出土の平瓦で、格子叩きを施している。11から18は梵鐘鑄造土坑S K01の埋め戻し土から出土した平瓦のなかで、表面の叩きのバリエーションを集めた。白鳳期から平安時代までのものを含んでいると思われる。



写真45 S D01完掘状況(西から)



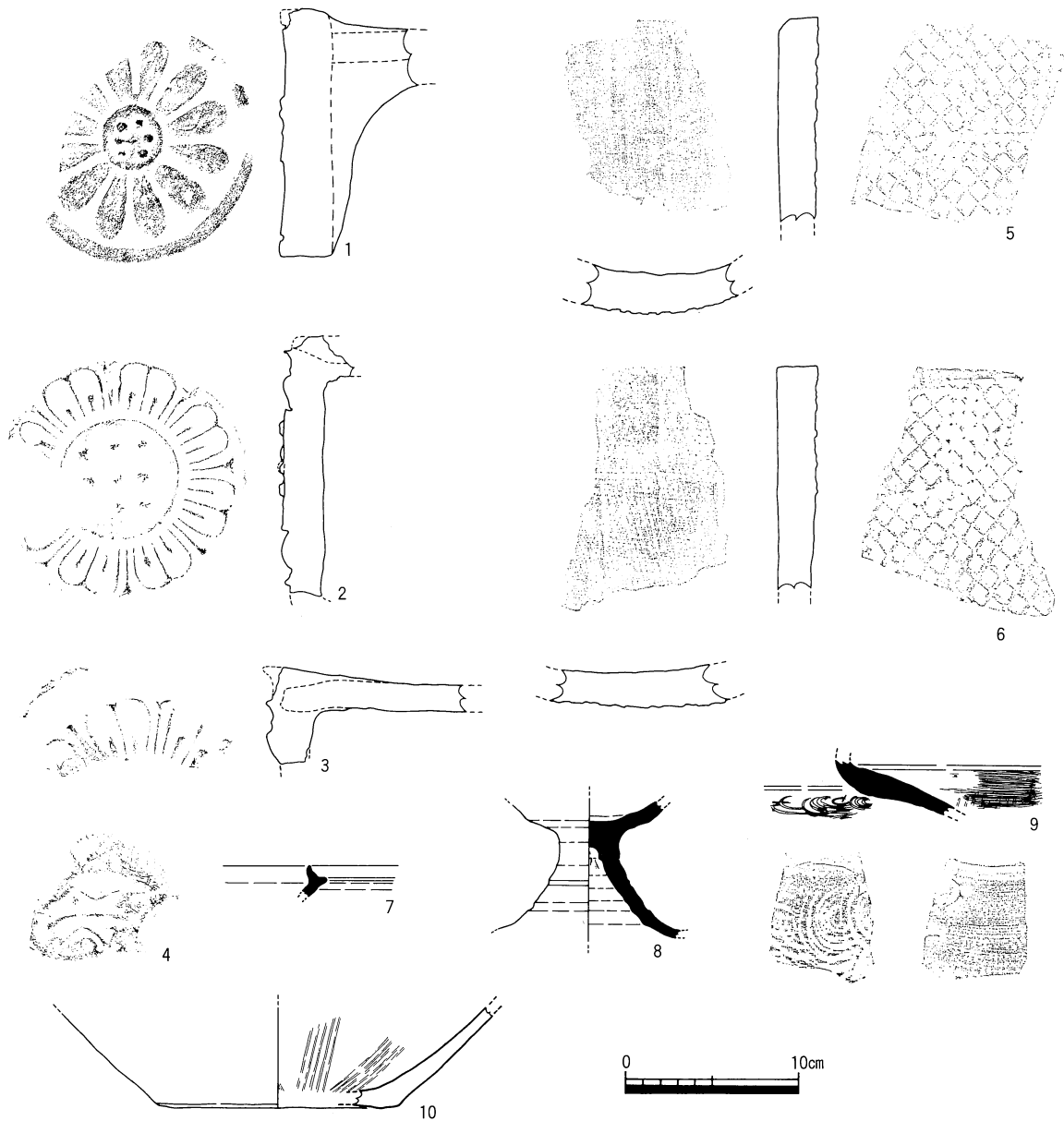
写真46 S D01・02土層断面(南東から)

3. まとめ

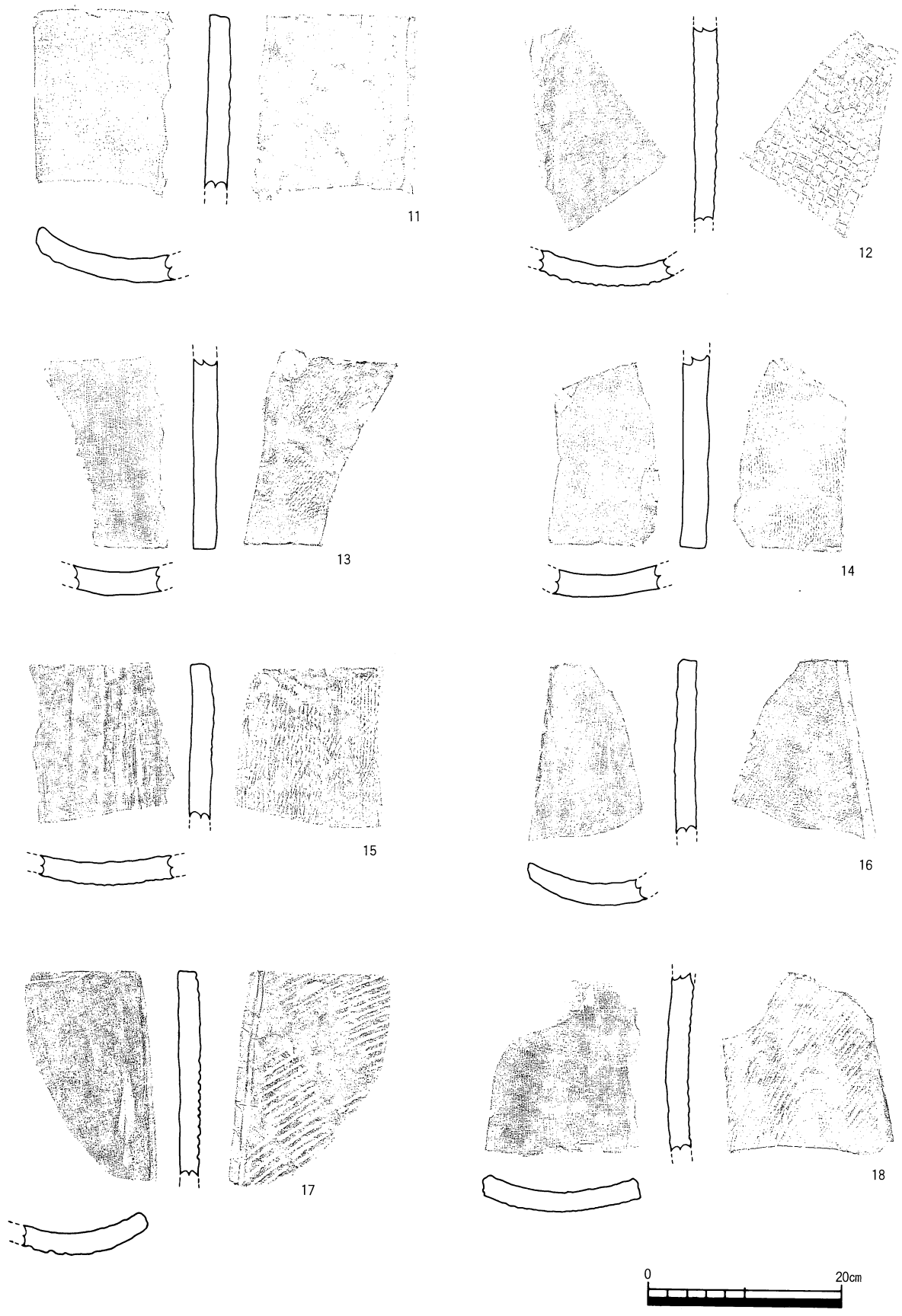
今回の調査は小規模ではあったが、その成果はとても大きなものであった。梵鐘鑄造土坑は、現段階ではその詳細な時期比定が出来ていないが、梵鐘を鑄造した遺構としては県内最古の例であり、鑄造土坑の構築から埋没・廃棄までの一連の過程が判明するものである。おそらく畿内あたりの鑄物師による出吹きが行われたものと思われるが、当例のように鑄型の固定に掛木を用いず埋め戻すことのみで行う方法が一般的なものであったのか、鑄物師の一つの流派独特の手法であるのか興味深いところである。

また、築地塀の存在を想定させる雨落ち溝は、これまでその内容のわからなかった田村廃寺の北限を示すものである可能性があり、今後の田村廃寺の実体解明の嚆矢となれば幸いである。

梵鐘鑄造土坑の調査に際しては、五十川伸矢氏・亀田修一氏・菱田哲郎氏・吉田晶子氏に現地にて指導ならびにさまざまなご教示を賜った。今回はそれらを十分生かしかれたとはとても言えないが、本報告の作成に向けての課題が若干でもみえてきたような気がする。改めてここに深く感謝の意を表します。



第34図 出土遺物実測図① (1 / 4)



第35図 出土遺物実測図② (1/6)

IX. 花池尻北遺跡

1. 立地と環境

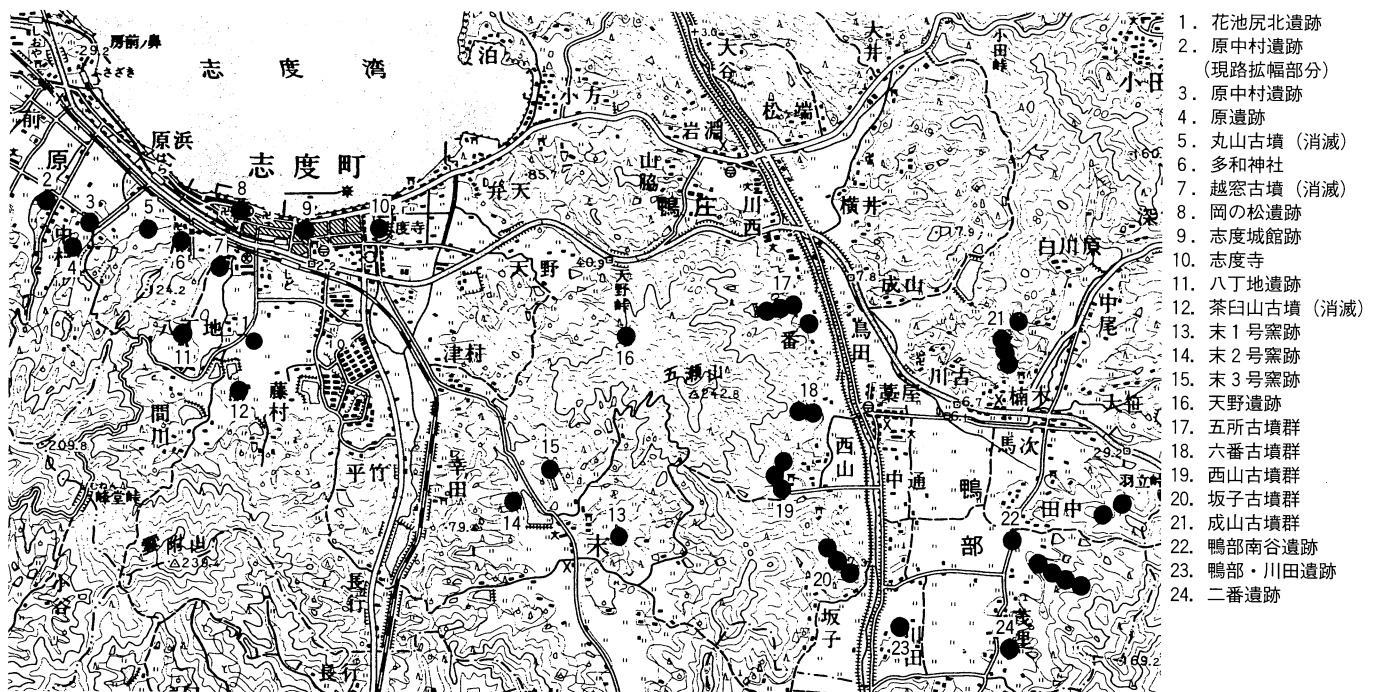
花池尻北遺跡は香川県大川郡志度町志度に所在する。志度町はその中央を南北に走る五瀬山(標高242.8m)を主峰とする山脈により、大きく西と東に区分されている。このうち志度町西部は志度平野を中心に北方を志度湾に面し、三方を丘陵地に囲まれる地形である。本遺跡は志度町西部の南西、雲附山付近の山嶺を源とする玉浦川により地表面を開墾された連続する小規模な段丘の末端に位置する。遺跡東方の志度平野では条里型地割の残存状況が比較的良好である。周辺の標高は約9 mを測る。

周辺の遺跡を時代順に紹介してゆく。各時代ともに発掘調査の例が少ないことから不明な部分が多い。旧石器時代では志度町東部、鴨部地区の鴨部・川田遺跡で旧石器時代末の細石刃核が出土しているのが唯一の例である。縄文時代では、本遺跡の南西の段丘上に位置する八丁地遺跡で玉浦川の旧流路に伴う洪水堆積と考えられる砂層から、縄文時代後～晩期の土器が出土している。

弥生時代では先述の鴨部・川田遺跡で弥生時代前期末～中期初頭の大規模な環濠が取り巻く集落跡が検出された。遺物でも多量の土器・石器・木器のほか、土偶などの出土により、弥生時代前期の基準資料として注目される。また丘陵をはさんで西隣の牟礼町には、弥生時代後期後半の竪穴住居集落と多量の土器を含む河川跡が検出された原中村遺跡がある。

古墳は志度・鴨部両平野を取り巻く山に多く営まれている。多和神社古墳、越窓古墳、茶白山古墳などのほか、東方の富田・石田・津田・鶴羽地区にまたがる旧寒川古墳群は、その大部分が大規模な前方後円墳であり、付近に有力な豪族の存在が想定できるが、集落は確認できていない。

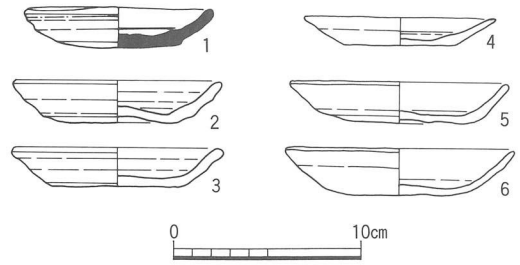
現在のところ志度平野を中心とした一帯では、八丁地遺跡で中世の溝・ピット等が検出された以外は、古代～中世の集落跡は発見されていない。しかし中世以来、志度には鍛冶や鋳物師が住んできた。丸亀市本島正覚院蔵の鰐口の裏には「志度大工沙弥西道」と刻まれている。永徳元年(1381年)に寄進されたものである。その後江戸時代にも鋳物業がおこなわれ、現在にまで及んでいる。



第36図 遺跡位置図 (1/50,000)

2. 調査の成果

当遺跡では主に古代末から近世にかけての遺構を検出した。掘立柱建物3棟・ピット多数・土抗6基・井戸4基・溝状遺構52条・自然流路2本などである。遺構中から出土した遺物は細片が多く、遺構の時期決定が困難なものが多い。ここでは主要な遺構・遺物を抽出して報告する。



第37図 土器溜まり出土遺物 (1/4)

古 代

土器溜まり 調査区中央付近で検出した遺構である。12世紀以降に堆積した洪水砂からなる包含層を除去した面での検出である。この包含層の除去中に遺構は確認できなかった。検出時には写真47のような状態であったが、これらを取り上げた後、さらに1点土師器坏が出土した。完掘時には浅い皿状の窪みが存在し、その中にこれらの土器を置いていたものと想定できる。ただし、遺構の上面が洪水による削平を受けている可能性も考えられ、遺構の性格としては地鎮遺構の底部のみが残存していた可能性が想定できる。須恵器小皿1 (第37図-1)・土師器小皿1 (同図-4)・坏4 (同図2・3・5・6) からなる。検出状況および遺物から11世紀ごろのものと想定できる。

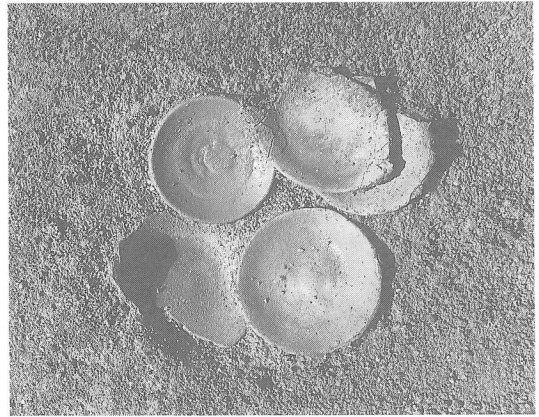
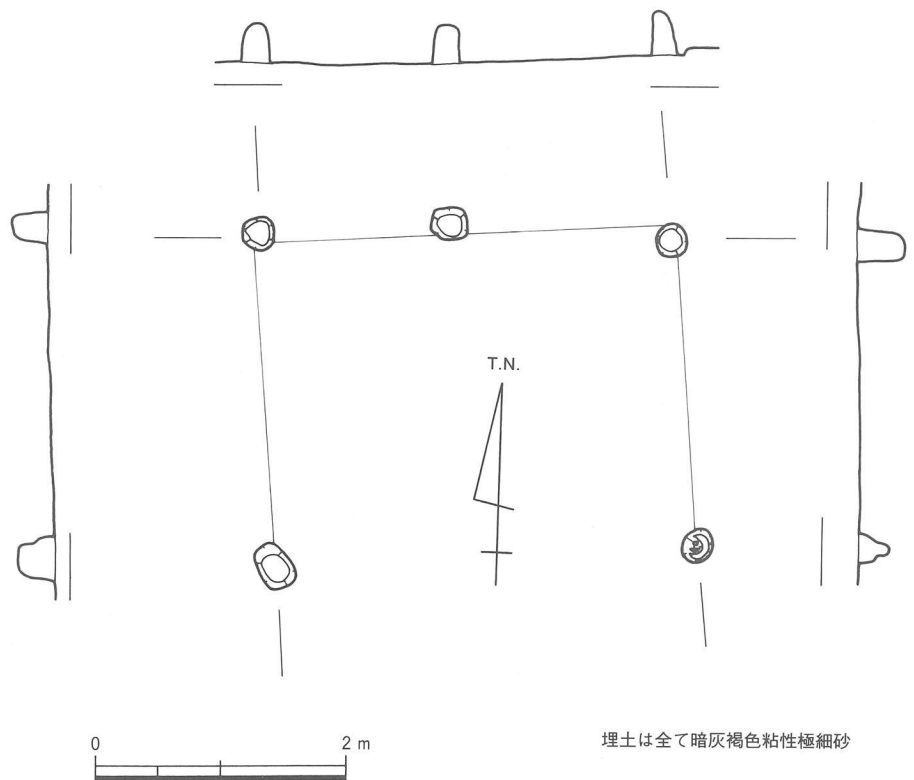


写真47 土器溜まり検出状況 (東から)

中 世

S B02 調査区中央やや東よりで検出した南北棟の掘立柱建物である。南側が調査区外へ伸びるため、詳細な規模は不明であるが検出できた規模は東西3.4m・南北3.5mをはかる。2間×3間程度の建物であったと想定できる。柱穴の規模はいずれも直径0.3m程度である。いずれも暗灰色混粗砂粘質土を埋土とする。主軸方位はN2°Wをはかる。この方



第38図 S B02平・断面図 (1/80)

位は、現在遺跡周辺に残る地割の方向とほぼ合致する。
この建物も遺物がほとんど出土していないため詳細な時期は不明であるが、出土遺物の細片から12世紀後半以前にその所属時期が想定できる。

S B03 調査区中央付近で検出した南北棟の掘立柱建物である。この建物の南西側の柱穴が検出できず詳細な規模は不明であるが、3間×4間程度の規模をもつ掘立柱建物が想定できる。検出できた規模は東西3.7m×南北5.6mをはかる。柱穴の規模はいずれも直径0.4m程度である。灰色混粗砂細砂を埋土にもつ。主軸方位はN7°Wをはかる。この建物も遺物がほとんど出土しておらず詳細な時期は不明である。ただし、この掘立柱建物の柱穴および周辺のピットから鉄片・鉄滓などを検出しており、近隣で鉄鍛冶あるいは鋳物が存在していたことを示す。

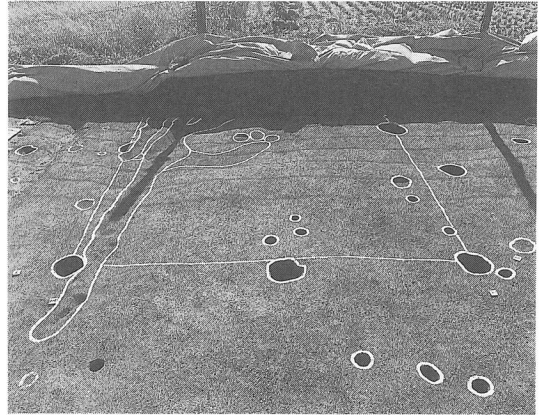
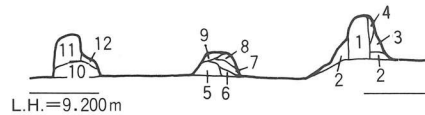


写真48 S B02 (北から)



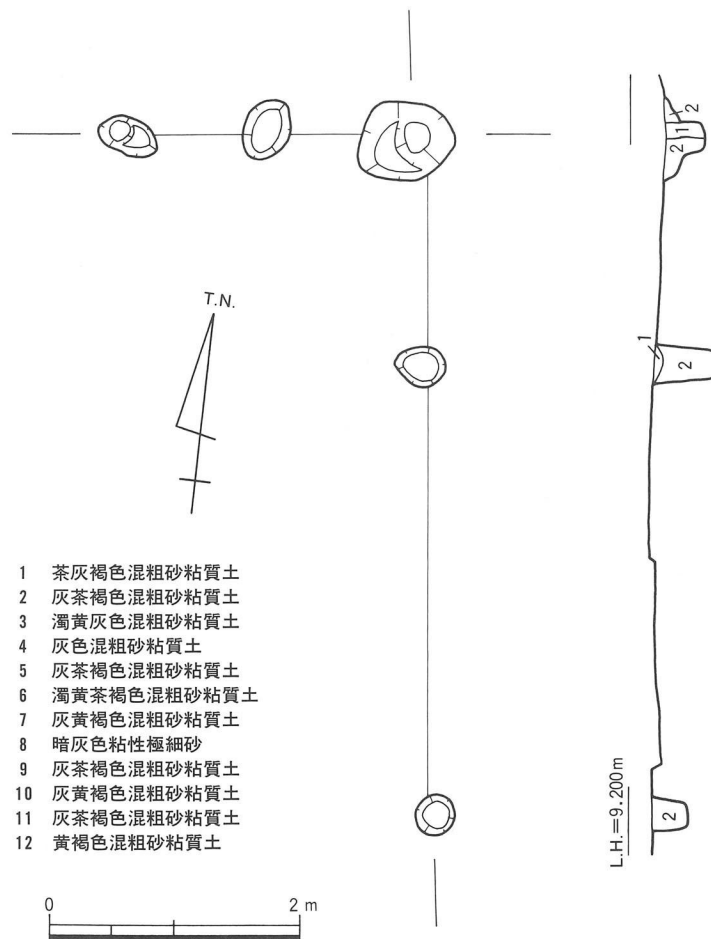
3. まとめ

当遺跡は特に東半分において後世の削平を著しく受けており、遺構の遺存状況は芳しくない。西半分についても、多数のピットを検出したものの、建物の構成が不明瞭である。今後の検討課題としたい。

以下、今回の調査成果の要点をまとめる。

1. 遺跡周辺の地割について

現在、遺跡周辺にはN1.5°Wの方向で方角地割が遺存する。調査前の段階ではこの地割がいつ頃施行されたかが焦点になると考えられたが、調査の結果、この地割の方向にほぼ並行する掘立柱建物や溝状遺構を検出し、出土遺物から13世紀以降のものであることが判明した。したがって、この地割は13世紀以降に施行さ



- 1 茶灰褐色混粗砂粘質土
- 2 灰茶褐色混粗砂粘質土
- 3 濁黄灰色混粗砂粘質土
- 4 灰色混粗砂粘質土
- 5 灰茶褐色混粗砂粘質土
- 6 濁黄茶褐色混粗砂粘質土
- 7 灰黄褐色混粗砂粘質土
- 8 暗灰色粘性極細砂
- 9 灰茶褐色混粗砂粘質土
- 10 灰黄褐色混粗砂粘質土
- 11 灰茶褐色混粗砂粘質土
- 12 黄褐色混粗砂粘質土

第39図 S B03平・断面図 (1/80)

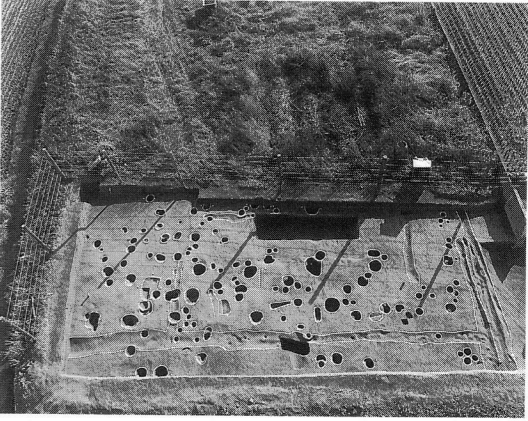
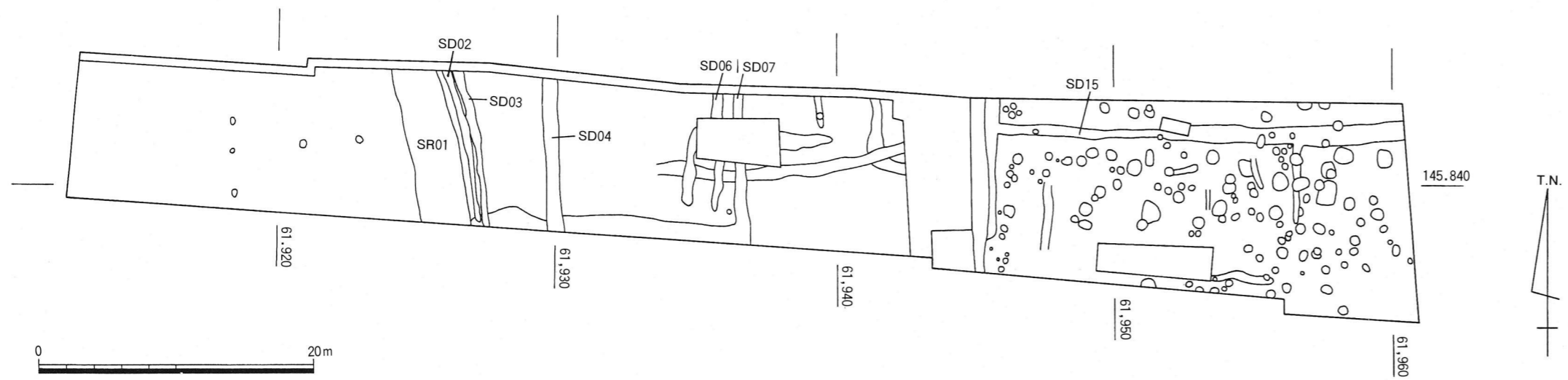
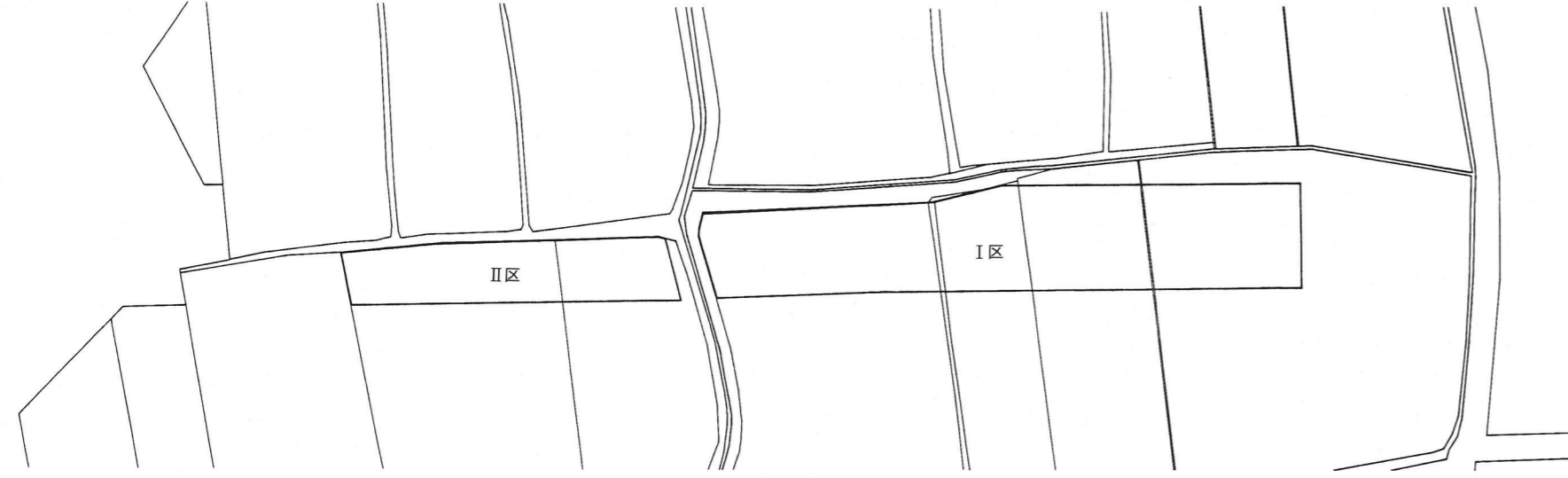
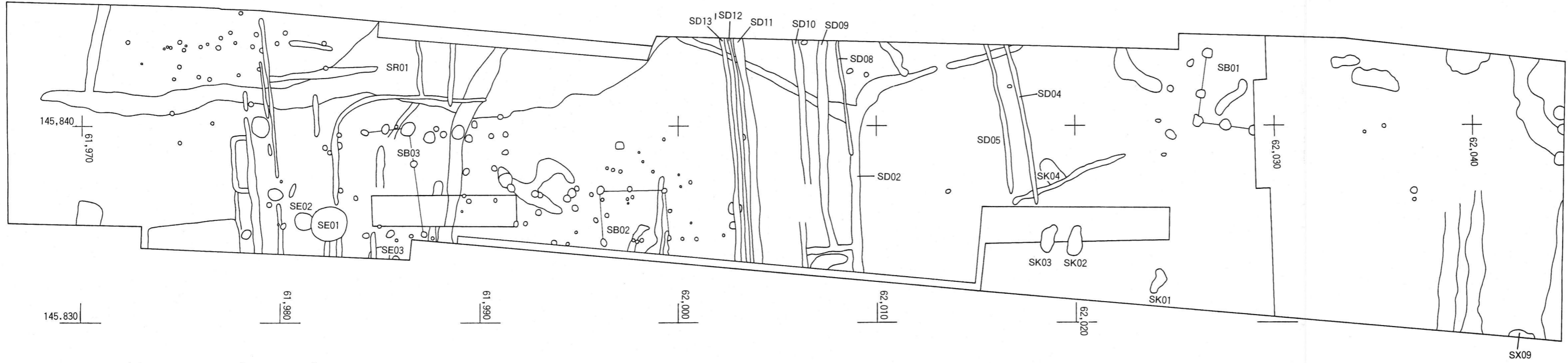


写真49 II区 遺構東半遺構完掘状況(北から)



第40図 遺構平面図及び調査区割図(1/400)



写真50 I区 遺構全景(西から)

れたものであることが想定できる。なお、『角川日本地名大辞典 37 香川県』（角川書店 1985）や『日本歴史地名大系第38巻 香川県の地名』（平凡社 1989）などによると、遺跡の存在する志度町志度地区には「志度庄」という荘園の存在が知られており、当遺跡はこの荘園の一角にあたることが想定できる。この荘園は文献においては鎌倉初期に初見されるとのことで、概ね調査成果と合致すると言える。

2. 「鍛冶屋」について

この遺跡においては、明確なもので3棟の掘立柱建物が検出できた。そのうちSB03とした室町時代頃のものと想定できる掘立柱建物およびその周辺のピット、溝状遺構を中心に鉄滓・鉄片が若干出土している。その他、やや離れた溝状遺構からも鉄滓やふいごの羽口片？が出土しているのをはじめ、包含層などからもコンテナ一杯分近く鉄滓が出土しており、遺跡内あるいは周辺において鍛冶関連遺構の存在が想定できた。残念ながら、遺跡内ではその痕跡は認められなかったものの、周辺に遺存している可能性がある。

一方、遺跡周辺一帯が志度庄遺称地とされているが、鎌倉時代に志度庄在住の刀鍛冶が存在したこと、江戸時代の志度村に「鍛冶屋」という地名が存在したことなどが知られている。現在の地名では遺跡周辺を「高柳」と称するが、旧称を「鍛冶屋」と称していたことが聞き取りからもわかっており、以上の点からも遺跡周辺に鍛冶関連遺構が存在する可能性は高いものと想定できる。

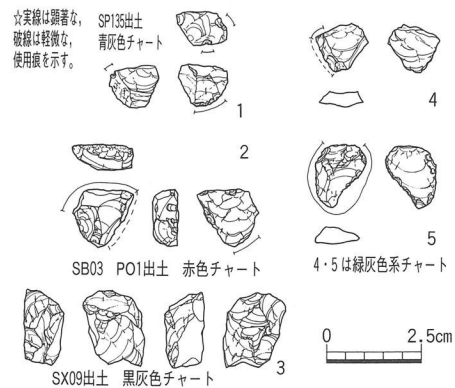
3. 出土遺物について

出土した遺物のうち、留意したいものとして火打石の出土が挙げられる。火打石は奈良時代に端を発する発火具で、中世・近世を通じて発火具の主体を占めていたとされる。当遺跡でも遺構中から3点、包含層から3点のチャート製火打石が出土している。遺構から出土したものうち、2点は他の共伴遺物が細片で詳細は不明であるが、先に述べたSB03から1点、鉄片と共に出土しているのが確認できた。SB03は鍛冶遺構との関連を想定しているが、発火具が伴う点においてこの建物の性格を想定するにあたり、参

考となる。チャートは基本的には在地の石材とは考えにくく、他地域から搬入されたものと想定できる。石材の色調は遺構から出土したものは赤色・黒色・やや透明感のある灰色で、包含層から出土したものはやや透明感のある青緑色を呈する。江戸時代には徳島県阿南市大田井産の透明感のある青色チャートが特産品として大坂城下・京都などへ搬出されていたようであるが、当遺跡の遺構内から出土したものはこれに合致しない。室町時代の志度は海上交通の要所となっていたようで、他地域からの物資の搬入出があったことが想定でき、遺構内出土品はこれらに伴って搬入された可能性が想定できる。県内他遺跡においてもチャート製あるいはサヌカイト製火打石の存在が確認できており、今後遺跡ごとの比較を行いその石材の特徴や傾向を検討してゆきたい。



写真51 Ⅰ区 南西隅遺構近景（北から）



第41図 花池尻北遺跡出土火打石（1/2）